

# 人口過程とエスニック・コミュニティ（1960年代）

——ニューヨーク市の黒人とプエルトリコ人——

倉田和四生

はじめに

- 〔1〕 人口移動・都市化・郊外化
  - 〔2〕 人口過程とエスニック・グループ
  - 〔3〕 人口移動とエスニック・マイノリティ
  - 〔4〕 郊外化とエスニック・マイノリティ
  - 〔5〕 エスニック・コミュニティと居住地の隔離
  - 〔6〕 エスニック・コミュニティ——ハーレムの変容
- むすび

## はじめに

ニューヨークは1898年に五つの自治区（borough）が合併して現在の市域となった。本稿では合併直後の1900年から1970年までの70年間にわたって進行した人口過程，すなわち海外からの移民，人口の国内移動，都市化および郊外化過程のなかで、エスニック・グループが変化を遂げながら、どのようにしてエスニック・コミュニティを形成していったかを跡づけてみよう。

エスニック・マイノリティにとって「人口移動」が重要な影響を及ぼすことは容易に理解されることであるが、ことに20世紀の初頭に進行したアメリカ黒人の南部から東部・北中部の都市への大移動がその後の黒人運動に与えた影響は計り知れないほど大きい。19世紀末黒人の9割は南部に住んでいたが、それから1945年ごろまでの間の第1次、第2次大戦中に自動車産業の発展と軍需工場の拡張にともなう労働力需要の急激な増大に引きつけられて、大量の黒人が東部・北中部の工場労働力として雇用されて都市化した。移動後、20～30年を経て黒人の子弟はより高い教育を受けて

知的水準を高めるとともに、市民権運動への理解や参加の割合を増加させた。このことが1950年代、M. L. キングの市民権運動に呼応し、全国的な規模で運動が広がり、遂に立法化に成功した背後にひそむ要因なのである。

社会階層を上昇移動していくために最も重要な手段は「教育」とであるとされているが、さらに教育を可能にしたのが南部農場から都市への人口移動であった。その意味で「人口移動」とエスニック・マイノリティの関係を論ずることは極めて重要である。

## 〔1〕 人口移動・都市化・郊外化

### （1）人口移動とその影響

人口過程を規定するのは出生・死亡および移動の三要因である。三つの要因が組合わさることによって人口は変動する。そこでこれら三つの要因はともに重要であるが、本稿では特に「人口移動」に焦点をおいて、ニューヨークの人口過程とエスニック・グループの形成を考察してみよう。

ところで人口の三要因のなかで移動の研究は最も複雑である。第1に移動の定義とその計量が容易ではない。第2に移動については出発地と目的地の設定が様々に決められ得ること。さらに個人の移動は自由意思によってなされるものであるから、意思決定に関与する価値や規範の研究は移動する場合としない場合の双方についてなされなければならない。第3に移動は個人単位でなされることもあれば集団でもなされるが、これらを別個に計量すると同時に両方を併せて計量することも必要である。以上の通り、移動の研究は出生、死亡に比べきわめて複雑である<sup>1)</sup>。

1) ビッシャーズ倉田和四生訳「人口と社会システム」鹿島出版会 第5章

ところで人口移動が個人および人格におよぼす影響ははかり知れないほど大きい。ある場所から他の場所に移動することは、旧い社会の絆をたち切ることになる。移動によって社会的義務を捨てるが、そのことは元の社会から得られていたものをすべて失なうことである。しかし新しいコミュニティの集団や階級上の地位は自動的に得られるものではない。試行錯誤を繰返しながら彼の属する集団とそこでの地位を獲得しなければならない。新しいコミュニティにおける移民の地位はもとの地位とは全く違うものである。ことに社会の中で人が与えられている地位を規定する原理が帰属的であるほど、そのギャップは大きくなる。移動した人間はもとの関心グループから離れ、階級への帰属感から切り離されるから、その個人は新しい集団の中に地位を得なければならない、新しいコミュニティにおいて彼が働く社会的レベルを確立しなければならない。彼は土着民の役割を捨て、外来者になるから、新しい地域に受入れられ地位を確立する過程は苦しく長い時間を必要とする。

移住は全く違った社会に入り異なる文化ことに言語も違う世界であるから、完全な適応同化は移民だけでなく、その子供でさえ不可能に近い。ブラジルやアメリカ合衆国のような国への移民達のなかでかなりの人は新しい社会に融け込むことに決してすぐに成功しているわけではない。彼等が

生きているかぎり、よそのものという社会的レッテルをはられ、差別に耐えなければならず、社会的環境に完全に適応することはほとんど不可能に近い。彼等の多くは古い世界をなつかしがる。そして二つの世界のはざまに生きる2世に与える影響は悲劇的でさえある。移民は母国の生活のパターンを身につけているので、新しい世界では絶えず緊張にさらされ、それから逃れようともがいている。2世は新しい社会的環境に受入れられるよう父の文化遺産への帰属感を捨てる。適応困難な世界で、移民と子孫に与えられる影響は容易に述べ難い程大きなものである。

(2) 世界の都市化と郊外化

第2次大戦が終わった1945年以降における最も顕著な現象は都市人口の急増であろう。世界のいたるところで人々は都市に集中して居住している。イタリアのボテロ (Giovanni Botero) が指摘したように技術と経済システムが発達していなかった前近代社会においては、食料の供給が制約条件となって都市の人口はある限界 (ローマで45万人) 以上に増大することは出来なかった<sup>2)</sup>。しかし19世紀中葉以降、産業革命が飛躍的にすすみ、数百万人の都市が出現するようになった。ことに第2次大戦後の人口爆発によって生み出された膨大な人口は都市の雇用能力を超えて都市に過度に集中し、1,000万人を超える超巨大都市が先進国のみならず中進国や、途上国にみられるように

表1 都市人口の割合 (5,000 人, 100,000 人) (地域別)

| 年    | 世界の総人口 | 5000 人以上の都市の比率 | 100,000 以上の都市人口の比率 |       |      |       |         |      |                  |
|------|--------|----------------|--------------------|-------|------|-------|---------|------|------------------|
|      |        |                | 世界全体               | ヨーロッパ | アジア  | 北アメリカ | ラテンアメリカ | アフリカ | オーストラリアとニュージーランド |
| 1800 | 906    | 3.0            | 1.7                | 3.0   | 1.6  | —     | 0.4     | 0.3  | —                |
| 1850 | 1171   | 6.4            | 2.3                | 5.8   | 1.7  | 5.5   | 1.5     | 0.2  | —                |
| 1900 | 1608   | 13.6           | 5.5                | 14.5  | 2.1  | 18.5  | 5.7     | 1.1  | 21.7             |
| 1950 | 2400   | 29.8           | 13.1               | 21.1  | 7.5  | 29.0  | 16.5    | 5.2  | 39.2             |
| 1960 | 2995   | 31.0           | 20.1               | 33.0  | 12.3 | 60.2  | 24.1    | 8.1  | 60.2             |
| 1970 | 3632   | 33.0           | 23.3               | 39.0  | 20.2 | 57.6  | 33.4    | 11.5 | 61.1             |

出所: Judah Matras, *Populations and Societies*, 1973, p. 85.

2) マルサスの人口理論の形成に示唆を与えたと見られるボテロ (Giovanni Botero 1543-1617) は「都市の偉大と壮大について」の中で、都市ローマは急速に成長したが、食料供給に限界があるため45万人以上は増加しないと指摘した。

なった<sup>3)</sup>。

個々の都市の歴史は研究されているが、世界の都市人口の歴史はせいぜい170年ぐらい前のことしか知られていない。1800年には人口5,000人以上の都市部 (cities and urban places) に住んでいたのは人口の3%であったと推測されている。そのうち2万人以上の市に住んでいたのは2.4%で、10万人以上の大都市に住んでいたのは、1.7%にすぎなかった。

1800年から1970年までの間に、世界の人口は4倍に増えたが、5,000人以上の都市部では11倍に達している。また10万人以上の都市では14倍に増大している。また1970年には5,000人以上の都市部の人口は世界人口の33%に達し、10万人以上の都市人口は23%に達している<sup>4)</sup>。

### (3) アメリカ合衆国における都市化と郊外化

マッケンジーはアメリカ定住の歴史を大雑把に三つの時期に分けている。第1は植民開始から19世紀の中頃に鉄道が敷設されるまでの時期である。この時期の定住は水路の周辺に限定されていた。また定住地はほとんどが農村であった。1850年にアメリカ合衆国の2,300万人のうち5分の4は農村又は8,000人以下のコミュニティに住んでいた<sup>5)</sup>。

第2の定住期は1850年から始まる。1870年までに鉄道が西海岸に達し、1900年までにはほとんどの鉄道網が完成した。これによってアメリカ合衆国の定住の基本型が出来上り、1850年から1930年までの間に10万人以上の都市が42誕生した。こうして19世紀の終わりごろから都市が主要な定住地となる。工業化に応じて、人口と富が大都市に次第に集中するようになる。都市は周辺の農村をも機能的に支配するようになった<sup>6)</sup>。

第3の定住の時期は1900年頃から始まる。この頃から自動車の普及によって郊外からの通勤が可

能となったため、富裕な人々は都心や中心都市に住むことをやめて、郊外に住むようになった。町や村も巨大な都市圏の一部に組込まれていくのである。この新しいタイプの巨大コミュニティは中核となる都市をめぐって組織され、多数の様々な活動センターを含んでいる。その領域は自動車輸送と他地区との競争によって決まる<sup>7)</sup>。

マッケンジーの3区分に加えて、第4の時期が区分される。第4期は1950年頃に始まる。メトロポリスはさらに発展して連続するようになった。1961年ガットマンはこれをメガロポリスと呼んだ<sup>8)</sup>。それはアメリカ合衆国の東部、ニューヨークからボストンまでの間に見られる都市の連担した状態である。そして専門化と相互依存がメガロポリスの最大の特徴である。

### (4) ニューヨーク大都市圏

ニューヨーク大都市圏はアメリカ合衆国最大の大都市圏である。ここでは今世紀の20年代から、多数の郊外居住者が中心都市ニューヨークに通勤していた。さらに第2次大戦後、膨大な数の住民が都心から脱出し郊外に居住したため、通勤者が爆発的に増大した。これに加えて多数の工場が市外へと移転して行った。この大都市圏は1940年までは全国の人口増加率よりも早い速度で増加したが、新しい大都市圏が次々と形成され発展していくので、この大都市圏が全国の人口に占める割合は1940年以降次第に低下している。

この間この地区の全人口に対する割合は9.8% (1960年) から1970年には8.9%、1980年には7.3%に低下している<sup>9)</sup>。このような割合の低下にもかかわらず、メガロポリスの中核としてのニューヨーク大都市圏の重要性は大いに増大している。

ここではアメリカ合衆国の中でもきわめて重要な位置を占めるニューヨーク大都市圏におけるエ

3) 国連の推計によると西暦2000年には、メキシコ市2,582万人、サンパウロ2,397万人、上海1,430万人、カルカッタ1,653万人、リオデジャネイロ1,326万人の巨大都市になる。United Nations, *The Prospects of World Urbanization, Assessed as of 1984-85*, New York, 1987, P. 25.

4) Judah Matras, *Population and Societies*, 1973, P. 85.

5) R. R. McKenzie, *The Metropolitan Community*, 1933, PP. 139-40.

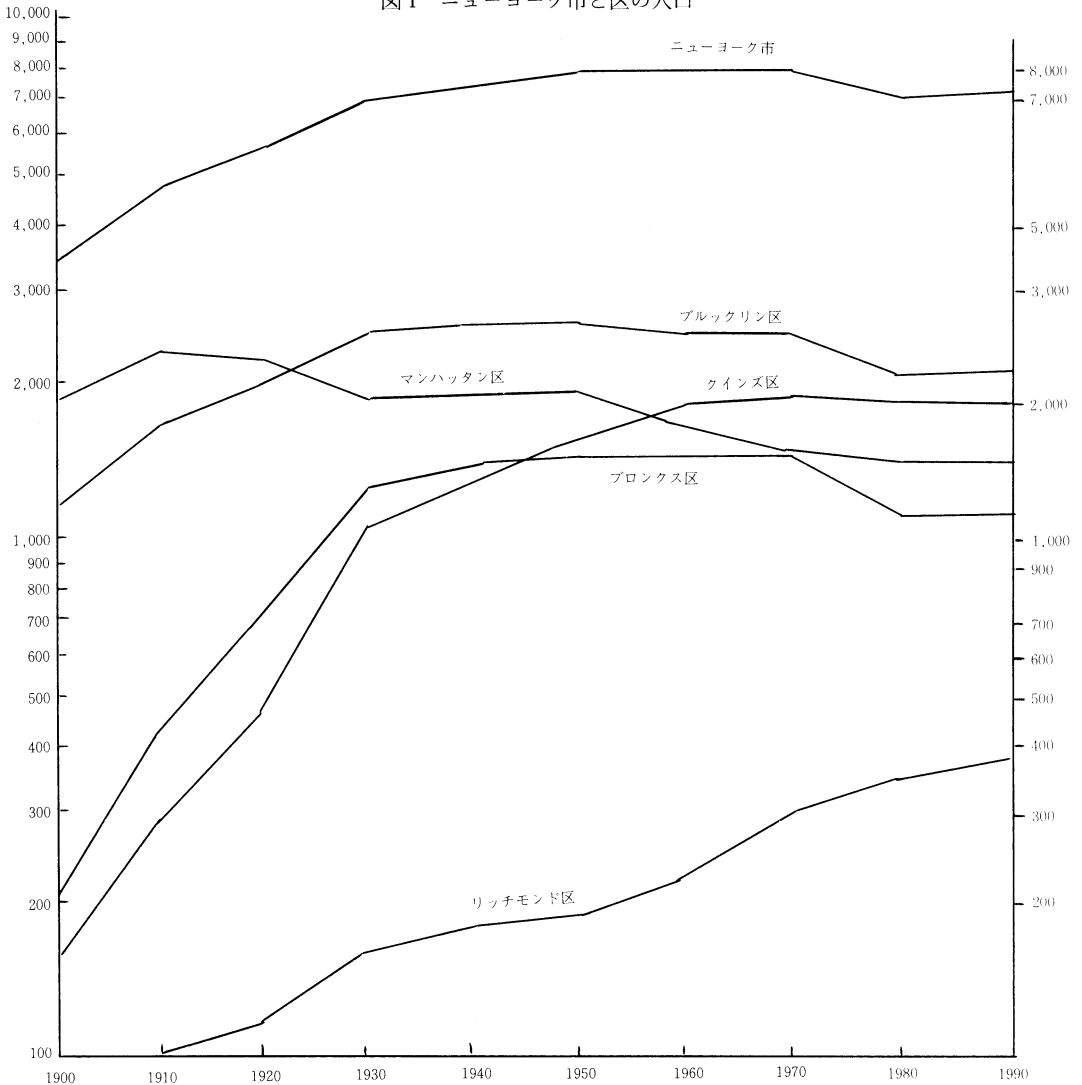
6) R. R. McKenzie, *The Metropolitan Community*, 1933, PP. 139-40.

7) R. D. McKenzie, *The Metropolitan Community*, 1933, PP. 139-40.

8) Jean Gottman, *Megalopolis: The Urbanized North Eastern Seaboard of the United States*, 1961.

9) 合衆国商務省センサス局編『現代アメリカデータ総覧1992』原書房31頁

図1 ニューヨーク市と区の人口



出所：米国の国勢調査

スニック・グループの形成と発展について考察してみよう。

## [2] 人口過程とエスニック・グループ

19世紀が終わろうとする1898年、ニューヨーク市は五つの自治区が統合して今日の市域を構成したが、これによって、当時、ロンドンに次ぐ世界第2位（343万人）の大都市となった。

ニューヨーク市はその後1930までは人口が急激に増加した。

### (1) 時期別にみた総人口の動向

#### ① 1900年～1910年（この期間に 38.7%増加）

言うまでもなく、人口の増減は出生と死亡および転入と転出の四変数によって決定される。1900年にニューヨーク市の人口は343.7万人であったが、1910年には133万人増加して、476.7万人となった。増加人口133万人のうち自然増（出生－死亡）は48.4万人（36.4%）で、社会増（転入－転出）は84.7万人（63.7%）であった。この時期は転入の果した力が大きいことが理解される。

今世紀の初めの10年頃までは移民はヨーロッパからはほとんど大きな障害もなく大量にアメリカに流入していた。84.7万人という大量の社会増（転

入—転出)数は市の人口の4分の1を増加させることになった。またこの期間には32,000人の黒人が転入によって増加している。その受入地はマンハッタン区であり、マンハッタン区の中心部にはヨーロッパからの移民と、転入した黒人が集住していた。

この時期早くもアメリカ生まれの白人は市の中心マンハッタン区から拡散を始めていた。ニューヨーク市に住む外国生まれの白人に比べると、アメリカ生まれの白人の数はわずかであったが、すでに63,000人が転出していた。

#### ② 1910年～1920年 (17.9%増)

1910年の市の人口は476.7万人であったが、10年間に85.3万人が増加し、1920年には562万人となった。そして増加人口85.3万人のうち自然増は51.1万人(59.9%)で社会増は34.2万人(40.1%)であった。この時期には社会増が減少し、自然増の方が大きくなっている。

この時期のヨーロッパからの移住は第1次大戦によって阻害された。外国生まれの白人の社会増(転入—転出)(net migration)は前の10年の半分以下であった。白人の転入数の減少とともに、「外国生まれの白人」の居住に適した区への拡散が明瞭になった。差引32,000人がマンハッタンから居住に適した区に転出した。この10年に合衆国生まれの白人とともに外国生まれの白人の拡散と郊外化の傾向も強まった。マンハッタン区の社会減(転出—転入)はブロンクス区とクインズ区の社会増(転入—転出)によって補なわれたが、合衆国生まれの白人の社会減(転出—転入)数は8.6万人に達した。

この10年間に黒人の社会増(転入—転出)の数は61,000人で他の非白人は4,000人であった。彼等も同様にマンハッタン区に集中して居住した。

#### ③ 1920年～1930年 (23.3%増)

1920年の市の人口は562万人であったが、10年間に131万人増加し、1930年には693万人となった。131万人の増加人口のうち自然増加によるものが63.5万人(48.5%)で、社会増(転入—転出)によるものは67.5万人(51.5%)であった。この期には転入が再び増加し、自然増を上回った。

この10年間には移民の規制があったにもかかわらず外国生まれの白人の社会増は55.7万人に達し

た。アメリカ生まれの白人と外国生まれの白人のより居住に適した区への拡散は継続し、合衆国生まれの白人の社会減は7.3万人であった。

黒人の社会増は14.4万人となった。その主力はマンハッタン区に向ったが、ブルックリン区(28,000人)にもマンハッタン区(86,000人)の3分の1程度の人が定着した。他の非白人の移住者数は前の10年ほどの数が持続した。

この時期のプエルトリコ人の社会増の数は42,000人であり、主にマンハッタン区に定住した。

#### ④ 1930年～1940年 (7.6%の増加)

1930年の市の人口は693万人であったが、10年間に52万5,000人が増加し、1940年には745万5,000人となった。増加人口52.5万人のうち、自然増によるものは26.7万人(50.9%)で、社会増によるものは25.8万人(49.1%)であった。この10年間には人口の増加数が大きく減少するとともに、自然増の方がわずかに上回った。

この時期は大恐慌の影響で増加の勢いが衰え、社会増加数が大きく減退した。外国生まれの白人の差引転入数は103,000人であった。またこれらの移民はヨーロッパから直接来住したのではなく間接の移民であった。というのは1924年来、移民は制限されていたからである。

アメリカ生まれと外国生まれの白人はともに市の中心から居住に適した区への拡散が続いた。アメリカ生まれの白人の純転入数はこれまでマイナスであったが、初めてプラス18,000人となった。

黒人の純転入数も少し減少して12万人となったが、外国生まれの白人の純転入数よりも多い。この10年には、黒人のマンハッタン区からの拡散が明瞭となった。

#### ⑤ 1940年～1950年 (5.9%増)

1940年の市の人口は745.5万人であったが、10年間に43.7万人が増加し、1950年には789.2万人に達した。増加人口43.7万人のうち自然増加が56.2万人で、社会減は12.3万人に達した。転入が激減した上に郊外への転出が急増したため、はじめて社会減となった。

この10年間には第2次大戦によって移動が強制され、また大戦後に人口移動が増加した。しかし外国生まれの白人の社会増加数はわずか47,000人

表 2 ニューヨーク市と区の人口

| 市・区<br>年 | ニューヨーク市       | ブロンクス | ブルックリン | マンハッタン | クイーンズ | リッチモンド |
|----------|---------------|-------|--------|--------|-------|--------|
|          | 人口数 (単位 1000) |       |        |        |       |        |
| 1900     | 3,437         | 201   | 1,167  | 1,850  | 153   | 67     |
| 1910     | 4,767         | 431   | 1,634  | 2,332  | 284   | 86     |
| 1920     | 5,620         | 732   | 2,018  | 2,284  | 469   | 117    |
| 1930     | 6,930         | 1,265 | 2,560  | 1,867  | 1,079 | 158    |
| 1940     | 7,455         | 1,395 | 2,698  | 1,890  | 1,298 | 174    |
| 1950     | 7,892         | 1,451 | 2,738  | 1,960  | 1,551 | 192    |
| 1960     | 7,782         | 1,425 | 2,627  | 1,698  | 1,810 | 222    |
| 1970     | 7,896         | 1,472 | 2,602  | 1,539  | 1,987 | 295    |
| 1980     | 7,072         | 1,169 | 2,231  | 1,428  | 1,891 | 352    |
| 1990     | 7,323         | 1,204 | 2,301  | 1,488  | 1,952 | 379    |

年増加率

|           |      |      |      |      |      |     |
|-----------|------|------|------|------|------|-----|
| 1900—1910 | 3.9  | 11.4 | 4.0  | 3.0  | 8.6  | 2.8 |
| 1910—1920 | 1.8  | 7.0  | 2.4  | -0.2 | 6.5  | 3.6 |
| 1920—1930 | 2.3  | 7.3  | 2.7  | -1.8 | 13.0 | 3.6 |
| 1930—1940 | 0.8  | 1.0  | 0.5  | 0.1  | 2.0  | 1.0 |
| 1940—1950 | 0.6  | 0.4  | 0.1  | 0.4  | 2.0  | 1.0 |
| 1950—1960 | -0.1 | -0.2 | -0.4 | -1.3 | 1.7  | 1.6 |
| 1960—1970 | 0.1  | 0.3  | -0.1 | -0.9 | 1.0  | 3.3 |
| 1970—1980 | -1.0 | -2.0 | -1.4 | -0.7 | -0.4 | 1.9 |
| 1980—1990 | 0.3  | 0.3  | 0.3  | 0.4  | 0.3  | 0.7 |

出所：1900—1990 米国の国勢調査

表 3 ニューヨーク市と区の人口の変化

| 市・区<br>年  | ニューヨーク市       | ブロンクス | ブルックリン | マンハッタン | クイーンズ | リッチモンド |
|-----------|---------------|-------|--------|--------|-------|--------|
|           | 人口数 (単位 1000) |       |        |        |       |        |
| 1900—1910 | 1,330         | 230   | 468    | 48     | 131   | 19     |
| 1910—1920 | 853           | 301   | 384    | -47    | 185   | 31     |
| 1920—1930 | 1,310         | 533   | 542    | -417   | 610   | 42     |
| 1930—1940 | 525           | 129   | 138    | 23     | 219   | 16     |
| 1940—1950 | 437           | 57    | 40     | 70     | 253   | 17     |
| 1950—1960 | -110          | -26   | -111   | -262   | 259   | 30     |
| 1960—1970 | 114           | 47    | -25    | -159   | 178   | 73     |
| 1970—1980 | -824          | -303  | -371   | -111   | -96   | 57     |
| 1980—1990 | 251           | 35    | 70     | 60     | 61    | 27     |

率

|           |       |      |       |        |        |       |
|-----------|-------|------|-------|--------|--------|-------|
| 1900—1910 | 100.0 | 17.3 | 35.2  | 36.2   | 9.9    | 1.4   |
| 1910—1920 | 100.0 | 35.3 | 45.0  | -5.6   | 21.7   | 3.6   |
| 1920—1930 | 100.0 | 40.7 | 41.4  | -31.8  | 46.5   | 3.2   |
| 1930—1940 | 100.0 | 24.7 | 26.3  | 4.3    | 41.6   | 3.1   |
| 1940—1950 | 100.0 | 12.9 | 9.1   | 16.1   | 58.0   | 3.9   |
| 1950—1960 | 100.0 | 24.1 | 100.8 | 238.1  | -235.3 | -27.7 |
| 1960—1970 | 100.0 | 41.2 | -21.9 | -139.5 | 156.2  | 64.0  |
| 1970—1980 | 100.0 | 36.8 | 45.0  | 13.4   | 11.7   | -6.9  |
| 1980—1990 | 100.0 | 13.9 | 27.9  | 23.9   | 24.3   | 10.8  |

出所：1900—1990 米国の国勢調査

表2 ニューヨーク市と区の人口比

| 年    | 市・区 | ニューヨーク市 | ブロンクス | ブルックリン | マンハッタン | クインズ | リッチモンド |
|------|-----|---------|-------|--------|--------|------|--------|
| 1900 |     | 100.0%  | 5.8%  | 34.0%  | 53.8%  | 4.4% | 2.0%   |
| 1910 |     | 100.0   | 9.0   | 34.3   | 48.9   | 6.0  | 1.8    |
| 1920 |     | 100.0   | 13.0  | 35.9   | 40.6   | 8.4  | 2.1    |
| 1930 |     | 100.0   | 18.3  | 36.9   | 26.9   | 15.6 | 2.3    |
| 1940 |     | 100.0   | 18.7  | 36.2   | 25.4   | 17.4 | 2.3    |
| 1950 |     | 100.0   | 18.4  | 34.7   | 24.8   | 19.7 | 2.4    |
| 1960 |     | 100.0   | 18.3  | 33.8   | 21.8   | 23.3 | 2.8    |
| 1970 |     | 100.0   | 18.6  | 33.0   | 19.5   | 25.2 | 3.7    |
| 1980 |     | 100.0   | 16.5  | 31.5   | 20.2   | 26.7 | 5.0    |
| 1990 |     | 100.0   | 16.4  | 31.4   | 20.0   | 26.6 | 5.2    |

出所：米国の国勢調査

であった。その上、アメリカ生まれの白人の社会減少数は52.7万人に達した。

これと対照的に、黒人の社会増加数は21.7万人と急増し、またプエルトリコ人も13.2万人も社会増加があった。そこでこれらの社会増加数によって、アメリカ白人の膨大な郊外への脱出者を補なうこととなった。

⑥ 1950年～1960年（－1.4%）

1950年の市の人口は789.2万人であったが、10年間に11万人減少し、1960年には778.2万人となった。減少人口の内訳をみると、自然増48.1万人、社会減59.1万人となっている。前期にくらべ自然増も減少し、社会減が急増している。郊外化が大規模に進行していることがわかる。

この時期には大都市の衰退により郊外化と工場の移転等が重なり1.4%のマイナス（－110,000人）となった。この10年間は外国生まれの白人の社会増加数は32,000人と少なかった。しかしアメリカ生まれの白人の社会減は1,086,000人にも達した。このように白人の郊外化は大規模に継続されている。

それに対して黒人の社会増加数はやや減少して195,000人となり、プエルトリコ人の社会増加数は255,000人で最高となった。

⑦ 1960年～1970年（＋1.5%）

1960年の市の人口は778.2万人であったが、10年間に11.4万人増加し、1970年には789.6万人となった。増加人口11.2万人の内訳は自然増が63.4万人で、社会減が52.1万人であった。自然増がやや増加したが、社会減は前期とほぼ同じ数である。

この時期には市の人口に大きな変化はなく、わ

ずか1.5%の増加がみられた。この10年間には白人の社会減少数はその10年よりやや減少して85.8万人であった。郊外化はこの時期も続いている。

これと対照的に非白人の社会増加数は354,000人となった。これは1900年以来、最大の数であった。ところがこの時期にはプエルトリコ人の巨大な流入が終わり、マイナスに転じた。これは大きな変化であった。

⑧ 1970年～1980年（－10.5%）

この10年間はニューヨーク市始まって以来の最大の人口が減少した。全市で82万4,000人も減っている。産業の空洞化と郊外化が同時に進行した為であろう。ことにブロンクス区、ブルックリン区で大きく減少した。増加したのはリッチモンド区だけである。

⑨ 1980年～1990年（＋3.5%）

この期間には全市で25.1万人増加した。ブルックリン区、マンハッタン区、クインズ区が増加している。マンハッタン区の増加が注目される。

（2）区別にみた人口動向

区別にみると、1900年当時、人口が最も多かったのはマンハッタン区（185万）で、次がブルックリン区（116.7万）であり、ブロンクス区が20万で、クインズ区、リッチモンド区はいずれも20万人以下であった。それが30年間に大きく変化した。

市全体の人口は1940年代に入ると横バイとなったが、その後も区別にみるとその動態には大きな相異があり、増加する区もあれば減少する区もある。

① マンハッタン区

マンハッタン区は1900年当時に185万人で五区

のうち最高であった。1910年には急増して233万人に達したが、その後減少に向い、1930年には186.7万人となった。マンハッタン区は1910年から1930年までに465,000人の人口を失なった。1930年から1950年の間はほぼ横バイが続き、1950年には196万人とやや増加したが、その後、再び減少に向っている。1950年から1970年の間に421,000人の人口が減少し、1970年には153.9万人となっている。この区を中心地区をみるとさらに劇的に減少している。そして1980年には142.8万人になったが1990年には6万人増加して148.8万人になった。この期間にはニューヨーク市の人口減少が停っただけでなく都心のマンハッタン区も再び増加に転じた。

## ② ブルックリン区

ブルックリン区は1900年の116.7万人から1930年の256万人まで急激に人口が増加した。この期間は5区の中で最高に増加している。その後も1950年の273.8万まで少しづつ増加を続けて来たが1950年以降はここも減少区となり、ごくわずかつつ減少に向い1970年には260万人となった。1970～1980年間には37万人という市内で最大の人口が減少したが、1980～1990年には7万人が増加して230万人となった。

## ③ ブロンクス区

ブロンクス区は1900年の20万人から1930年の126.5万人まで劇的な増加がみられた。その後増加の勢いは弱まったが、増加はつづき1950年には145万人となった。しかしその後横バイに転じ、1960年には142.5万人、1970年には147万人となっている。1970～1980年の間にはブロンクス区もブルックリン区について大量の人口（30万人）が減少したが、1980～1990年には3.5万人が増加して120万人となった。

## ④ クインズ区

クインズ区は1900年の15.3万人から1930年の107.9万人へと爆発的な増加がみられた。これはニューヨーク市の歴史で最高の増加率を示したものである。この時期にニューヨーク市において如何に急激な郊外化が進行したかを物語るものである。1930年以降も一貫して増加が続き、1960年には181万人、1970年には198.7万人に達した。1930

年から1960年にかけては北クインズが高い増加率を示したが、1960年以降は南クインズが高い増加率を示している。

1970～1980年にはクインズ区も初めて9.6万人の人口を失なったが1980～1990年には6.1万人も増加し195万人となった。

## ⑤ リッチモンド区

リッチモンド区は1900年当時、6.7万人と最も人口の少ない区であった。しかし1930年まで急激な増加がみられ、15.8万人になっている。その後も増加が続き、1940年に17.4万人、1950年19.2万人、1960年には22.2万人となった。さらに1960年から年間3.3%も増加し1970年には29.5万となった。この時期においては、5つの区の中で最大の増加を示している。さらに1970年以降もこの区だけが例外的に増加が続く、1990年には37.9万人となっている。

## ⑥ 区の動向の概括

1. 五区を通じて言えることは、都市的な性格をもつマンハッタン区はすでに1910年から人口流出が始まっている。その後も1950年を除き一貫して減少している。

2. ブルックリン区では1930年まで少し増加したが、その後は増加が止まり、1950年から減少に転じていたが、1990年に微増した。

3. 郊外的な性格のブロンクス区は1930年まで急増したが、その後増加の勢は弱まり、1980年には減少したが、1990年には微増した。

4. クインズ区とリッチモンド区は1930年まで急増した。その後も1970年までかなり増加している。

5. 1970～1980年の10年間に市の歴史上、最大の人口減少となったが、1980～1990年には再び市の人口は増加に転じた。



[3] 人口移動とエスニック・マイノリティ

(1) ニューヨーク市への移民の来住

ニューヨーク市の人口の増加は第2次大戦までは主にヨーロッパからの移民と南部黒人の流入によるものであった。1880年から1890年までの間、

ニューヨーク市の外国生まれの人口は478,670人から639,943人と161,000人も増加している。

1) アイルランド系とドイツ系

19世紀の後半、ニューヨーク市に人口を送り出している主な国はアイルランドとドイツであった。1880年には外国生まれとその子孫は全体の44%がアイルランド系、ドイツ系が37%を占めて

表5. ニューヨーク市のエスニック別（出生地別）人口（1900—1970）と  
ニューヨーク大都市圏の郊外部のエスニック別人口（1900—1960）

| 年 | エスニック別<br>合計 | 人口（単位1000） |       |     |     |           |           |
|---|--------------|------------|-------|-----|-----|-----------|-----------|
|   |              | 白人         |       | 非白人 |     | プエルトリコ人   |           |
|   |              | 合衆国生まれ     | 外国生まれ | 黒人  | その他 | プエルトリコ生まれ | 親がプエルトリコ人 |

ニューヨーク市

|      |       |       |       |       |     |     |     |
|------|-------|-------|-------|-------|-----|-----|-----|
| 1900 | 3,437 | 2,108 | 1,261 | 61    | 7   | 0   | 0   |
| 1910 | 4,767 | 2,740 | 1,928 | 92    | 6   | 1   | 0   |
| 1920 | 5,620 | 3,462 | 1,991 | 152   | 8   | 7   | —   |
| 1930 | 6,930 | 4,252 | 2,295 | 321   | 13  | 49  | —   |
| 1940 | 7,455 | 4,845 | 2,080 | 450   | 19  | 61  | —   |
| 1950 | 7,992 | 5,107 | 1,784 | 728   | 28  | 187 | 58  |
| 1960 | 7,782 | 4,588 | 1,464 | 1,060 | 57  | 430 | 183 |
| 1970 | 7,895 | 4,142 | 1,203 | 1,594 | 138 | 473 | 344 |

パーセント

|      |       |      |      |      |     |     |     |
|------|-------|------|------|------|-----|-----|-----|
| 1900 | 100.0 | 61.4 | 36.7 | 1.8  | 0.2 | —   | —   |
| 1910 | 100.0 | 57.5 | 40.4 | 1.9  | 0.1 | —   | —   |
| 1920 | 100.0 | 61.6 | 35.4 | 2.7  | 0.1 | 0.1 | —   |
| 1930 | 100.0 | 61.3 | 33.1 | 4.6  | 0.2 | 0.7 | —   |
| 1940 | 100.0 | 65.0 | 27.9 | 6.0  | 0.3 | 0.8 | —   |
| 1950 | 100.0 | 64.7 | 22.6 | 9.2  | 0.4 | 2.4 | 0.7 |
| 1960 | 100.0 | 59.0 | 18.8 | 13.6 | 0.7 | 5.5 | 2.3 |
| 1970 | 100.0 | 52.5 | 15.2 | 20.2 | 1.7 | 6.0 | 4.4 |

ニューヨーク大都市圏の郊外部

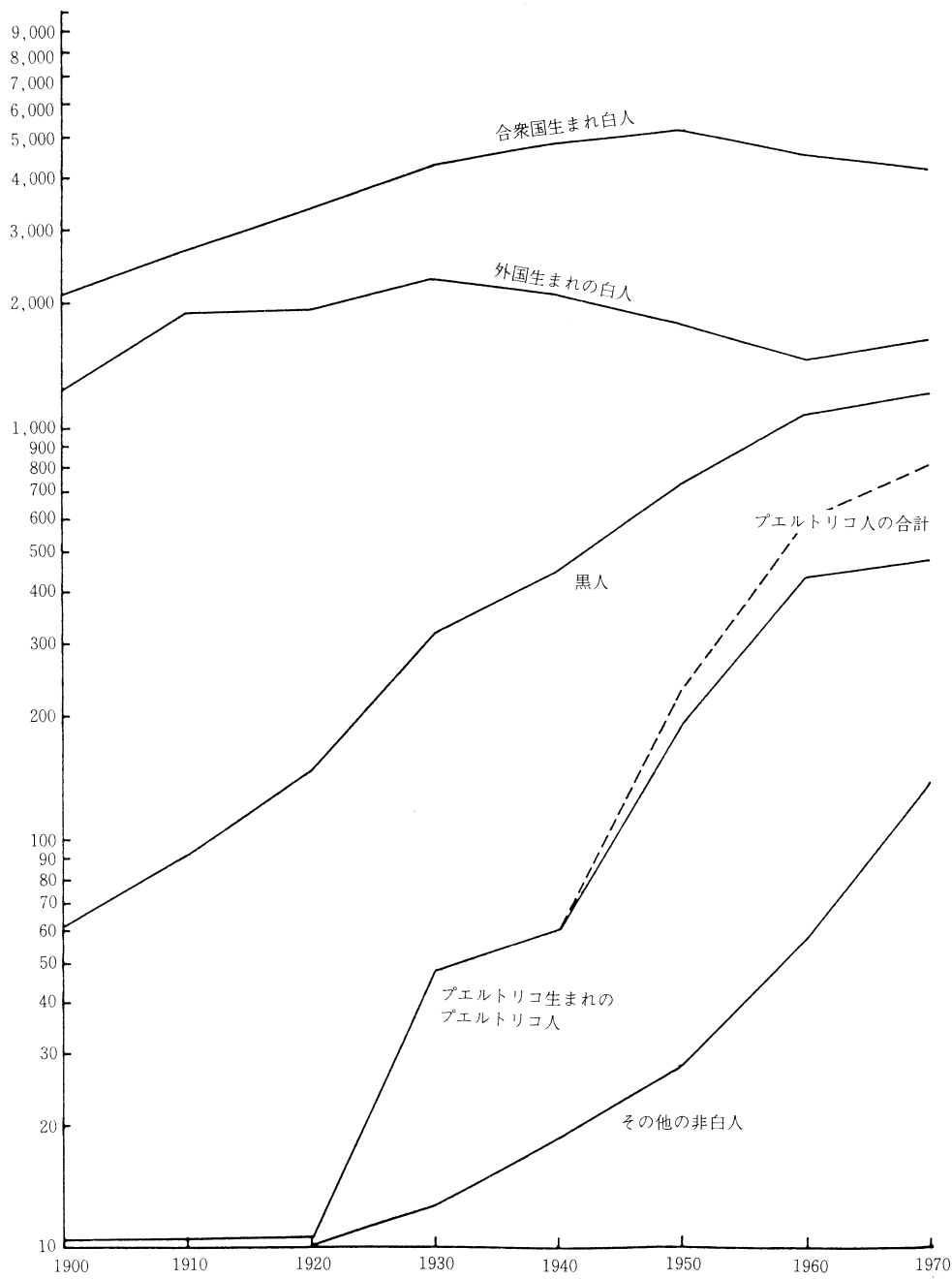
|      |       |       |     |     |   |    |   |
|------|-------|-------|-----|-----|---|----|---|
| 1930 | 1,045 | 777   | 228 | 39  | 1 | 0  | 0 |
| 1940 | 1,252 | 976   | 219 | 56  | 1 | 0  | 0 |
| 1950 | 1,664 | 1,352 | 233 | 73  | 2 | 3  | 1 |
| 1960 | 2,914 | 2,456 | 294 | 140 | 7 | 10 | 7 |

パーセント

|      |       |      |      |     |     |     |     |
|------|-------|------|------|-----|-----|-----|-----|
| 1930 | 100.0 | 74.3 | 21.8 | 3.7 | 0.1 | —   | —   |
| 1940 | 100.0 | 77.9 | 17.5 | 4.5 | 0.1 | —   | —   |
| 1950 | 100.0 | 80.8 | 14.3 | 4.5 | 0.1 | 0.2 | 0.1 |
| 1960 | 100.0 | 84.3 | 10.1 | 4.8 | 0.2 | 0.3 | 0.2 |

出所：N. Kantrowitz, *New York City Migration, 1900—1960*, p. 1. 22.

図2 ニューヨーク市と区のエスニック別人口



出所：米国の国勢調査

表 6 . ニューヨーク市の人口 (エスニック, 出生地別) 1900~1970 年 (単位 1000)

| 年    | エスニック<br>出生地別<br>合計 | 白人     |       | 非白人   |     | プエルトリコ人       |               |
|------|---------------------|--------|-------|-------|-----|---------------|---------------|
|      |                     | 合衆国生まれ | 外国生まれ | 黒人    | その他 | プエルトリコ<br>生まれ | 親がプエルト<br>リコ人 |
| 1900 | 3,437               | 2,108  | 1,261 | 61    | 7   | 0             | 0             |
| 1910 | 4,767               | 2,740  | 1,928 | 92    | 6   | 1             | 0             |
| 1920 | 5,620               | 3,462  | 1,991 | 152   | 8   | 7             | —             |
| 1930 | 6,930               | 4,252  | 2,295 | 321   | 13  | 49            | —             |
| 1940 | 7,455               | 4,845  | 2,080 | 450   | 19  | 61            | —             |
| 1950 | 7,892               | 5,107  | 1,784 | 728   | 28  | 187           | 58            |
| 1960 | 7,782               | 4,588  | 1,464 | 1,060 | 57  | 430           | 183           |
| 1970 | 7,895               | 4,142  | 1,203 | 1,594 | 138 | 473           | 344           |

(パーセント)

|      |     |      |      |      |     |     |     |
|------|-----|------|------|------|-----|-----|-----|
| 1900 | 100 | 61.4 | 36.7 | 1.8  | 0.2 |     |     |
| 1910 | 100 | 57.5 | 40.4 | 1.9  | 0.1 |     |     |
| 1920 | 100 | 61.6 | 35.4 | 2.7  | 0.1 | 0.1 |     |
| 1930 | 100 | 61.3 | 33.1 | 4.6  | 0.2 | 0.7 |     |
| 1940 | 100 | 65.0 | 27.9 | 6.0  | 0.3 | 0.8 |     |
| 1950 | 100 | 64.7 | 22.6 | 9.2  | 0.4 | 2.4 | 0.7 |
| 1960 | 100 | 59.0 | 18.8 | 13.6 | 0.7 | 5.5 | 2.3 |
| 1970 | 100 | 52.5 | 15.2 | 20.2 | 1.7 | 6.0 | 4.4 |

出所 : Nathan Kantrowiz, *New York City Migration*, p. l. 23. 米国の国勢調査 1970.

表 7 . ニューヨーク市人口の変化 (エスニック別) 1900—1970 (単位 1000)

| 年           | エスニック | 合計    | 白人    | 非白人   | プエルトリコ人 |
|-------------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 1900        |       | 3,437 | 3,369 | 68    | —       |
| 1910        |       | 4,767 | 4,668 | 98    | 1       |
| 1920        |       | 5,620 | 5,453 | 160   | 7       |
| 1930        |       | 6,934 | 6,547 | 334   | 49      |
| 1940        |       | 7,455 | 6,925 | 469   | 61      |
| 1950        |       | 7,892 | 6,890 | 756   | 246     |
| 1960        |       | 7,782 | 6,053 | 1,117 | 613     |
| 1970        |       | 7,895 | 5,345 | 1,733 | 817     |
| 変 化 1900—10 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 1,330 | 1,299 | 30    |         |
| パーセント       |       | 38.7  | 38.6  | 44.1  |         |
| 変 化 1910—20 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 853   | 785   | 62    | 6       |
| パーセント       |       | 17.9  | 16.8  | 63.3  |         |
| 変 化 1920—30 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 1,310 | 1094  | 174   | 42      |
| パーセント       |       | 23.3  | 20.1  | 108.8 | 600     |
| 変 化 1930—40 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 525   | 378   | 135   | 12      |
| パーセント       |       | 7.6   | 5.8   | 40.4  | 24.5    |
| 変 化 1940—50 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 437   | —35   | 287   | 185     |
| パーセント       |       | 5.9   | —0.5  | 61.2  | 30.3    |
| 変 化 1950—60 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | —110  | —837  | 361   | 367     |
| パーセント       |       | —1.4  | —12.1 | 47.7  | 149.1   |
| 変 化 1960—70 |       |       |       |       |         |
| 数           |       | 113   | —708  | 616   | 204     |
| パーセント       |       | 1.5   | —11.7 | 55.0  | 33.3    |

出所 : 米国の国勢調査.

表 8 . ニューヨーク市の区別の人口（エスニック別） 1940 年～1970 年 （パーセント）

| エスニック<br>年         | ニューヨーク市 | ブロンクス | ブルックリン | マンハッタン | クインズ | リッチモンド |
|--------------------|---------|-------|--------|--------|------|--------|
| 白人                 |         |       |        |        |      |        |
| 1940 <sup>1)</sup> | 100.0   | 19.6  | 37.1   | 22.6   | 18.2 | 2.5    |
| 1950               | 100.0   | 18.8  | 36.1   | 20.8   | 21.7 | 2.7    |
| 1960               | 100.0   | 17.8  | 34.2   | 17.5   | 27.1 | 3.4    |
| 1970               | 100.0   | 15.1  | 31.2   | 17.4   | 31.2 | 5.1    |
| 非白人                |         |       |        |        |      |        |
| 1940               | 100.0   | 5.1   | 23.1   | 65.4   | 5.6  | 0.8    |
| 1950               | 100.0   | 12.8  | 27.9   | 51.6   | 7.0  | 0.7    |
| 1960               | 100.0   | 14.6  | 33.7   | 37.1   | 13.8 | 0.9    |
| 1970               | 100.0   | 20.2  | 38.1   | 24.3   | 16.5 | 1.0    |
| プエルトリコ人            |         |       |        |        |      |        |
| 1940 <sup>1)</sup> | 100.0   | n.a   | n.a.   | n.a.   | n.a. | n.a.   |
| 1950               | 100.0   | 25.1  | 16.4   | 56.2   | 1.9  | 0.3    |
| 1960               | 100.0   | 30.5  | 29.4   | 36.8   | 2.8  | 0.4    |
| 1970               | 100.0   | 39.0  | 33.5   | 22.8   | 4.1  | 0.6    |

n. a. - 資料なし

1) プエルトリコ人を含む

出所：米国の国勢調査 1940～1970

いた<sup>10)</sup>。1900年にはドイツ系が433,352人でアイルランド系が380,639人であった<sup>11)</sup>。

2) ユダヤ系とイタリア系

ところが、この状況は1925年までに大きく変わり、ユダヤ系とイタリア系の数が前二者を陵駕するようになった。ユダヤ系は1901年には51万人であったが、1910年には105万人、1925年には1,713,000人となった。25年間に3倍以上の増加である。これは迫害によりロシアや東欧からユダヤ人が難民として脱出してニューヨーク市に定住したからである<sup>12)</sup>。

これに対してイタリア系は1900年には21万8,000人であったが、1910年には54万4,000人となり、1920年には80万3,000人に増加した。この増加のうち30万8,000人はイタリアからの移民で他は自然増によるものと考えられる<sup>13)</sup>。

3) エスニック・グループ

アメリカ合衆国全体がそうであるように、ニューヨーク市には多くのエスニック・グループが共存している。その主なものは白人と黒人とプエルトリコ人である。1900年では総人口の98%は白人で、黒人は1.8%、プエルトリコ人はまだ居なかった。プエルトリコ人が住み始めた1920年で見ると、白人97%、黒人2.7%でプエルトリコ人が0.1%である。さらにプエルトリコ人が急増した1950年で見ると、白人は86.1%、黒人は9.1%、プエルトリコ人が3%である。最近の1970年についてみると、白人は67.7%に減退し、黒人は20.2%、プエルトリコ人は10.3%となっている。近年、白人の割合が減少し、黒人とプエルトリコ人の割合がのびていることが知られる。1990年では白人はすでに過半数を割り43%、黒人は25%に達しており、プエルトリコ人も急増している。

(2) 白人の人口移動

表 9 ニューヨーク市における白人の人口（1900～1990年）（単位 1000）

| 年度        | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960  | 1970  | 1990  |
|-----------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 白人の人口     | 3369 | 4668 | 5453 | 6547 | 6934 | 6891 | 6052  | 5345  | 3827  |
| 増加率       |      | 38.5 | 16.8 | 20.1 | 5.9  | -6.2 | -12.2 | -11.7 | -28.4 |
| 総人口に占める比率 | 98.1 | 97.9 | 97.0 | 94.4 | 92.9 | 87.3 | 77.8  | 67.9  | 52.3  |

出所：米国の国勢調査

10) Ira Rosenwaike, *Population History of New York City*, PP. 67-73.

11) Ira Rosenwaike, *Population History of New York City*, P. 118.

12) Ira Rosenwaike, *Population History of New York City*, PP. 110-111.

13) Ira Rosenwaike, *Population History of New York City*, PP. 110-112.

1) 白人の総人口の動向

1900年にはニューヨーク市には合衆国生まれの白人が210万人と外国生まれの白人が126万人で、市の人口の98%を占めていた。当時は圧倒的にも人の街であった。

その後も急激に増加している。すなわち1900～1910年の間に38.5%の増加がみられ466万人となった。次の10年間(1910～1920)にも16.8%の増加がみられ545万人となる。さらに次の10年間(1920～1930)には20.1%と増加し654万人となった。ところが1930年から1940年には10年間に5.9%の増加にとどまった。ニューヨーク市の白人が増加したのは1940年までで、その後は郊外化現象でむしろ減少に向う。1940年～1950年の10年間には0.5%のマイナスとなった。その後、1950年～1960年になるとマイナスは12.1%に達した。このことははげしい郊外化が進行したことを裏づけている。そして1960年～1970年に11.7%のマイナス以降は一貫して白人人口の減退が持続しているわけである。

次にこれを総人口との比率でみると、1900年には98%で圧倒的に白人の町であったが、次第に減少に向い、1940年には92.9%となった。さらに1950年には87.3%となり、1960年には77.8%、1970年には67.9%、1990年には52.3%にまで低下した。いまやニューヨーク市は人数でいえば白人が支配的な町ではなくなっている。

ところがこれを大都市圏(SMSA)の郊外部でみると白人の数は急激に増加し、その95%ほどの比率もほとんど変化していない。白人の多くは郊外に住んでいる。

2) 外国生まれの白人の人口移動

今世紀の初めになると、ヨーロッパからの移民数が減退し、都市人口の増加の勢いは弱まった。1950年と1960年の10年間にはニューヨーク市の人口は減少したのである。この変化の決定要因の一つは外国生まれの白人の社会増が減退したことである。

①今世紀最初の30年間は外国生まれの白人の流入数は他のエスニック・グループにくらべ圧倒的に多かった。1900年から1910年の間に約90万人近い外国生まれの白人がニューヨークにやって来た。また次の20年間にも約92万人がニューヨークに來住した。これがニューヨーク市の人口急増の主たる原因であった。

②外国生まれの白人の人口流入についての顕著な特徴は1900年から1960年までの60年間に、878,000人から32,000人へと激減したことである。しかしながら次の10年間(1960～1970)にはいくらか増加(41,000人)している。

③自然動態(出生－死亡)についてみると、外国生まれの白人は一貫してマイナスで、1910～1920年に21万人のマイナスから次第にマイナスが増加し、1950～1960年には35万人の減となった。

表 10 ニューヨーク市の社会増と自然増の推計(エスニック別)(1900—1970)

| 年    | エスニック | 10年間の増減 | 社会増<br>自然増 | 全エスニック | 白人(プエルトリコ人を除く) |       | 非白人 |     | プエルトリコ人 |     |
|------|-------|---------|------------|--------|----------------|-------|-----|-----|---------|-----|
|      |       |         |            |        | 合衆国生まれ         | 外国生まれ | 黒人  | その他 | 出生      | 親   |
| 1900 | ]     | 1,330   | 社会増        | 847    | -63            | 878   | 32  | 0   | 0       | 0   |
| 1910 |       |         | 自然増        | 484    | 697            | -211  | -1  | -1  | 0       | 0   |
| 1910 | ]     | 853     | 社会増        | 342    | -86            | 363   | 61  | 4   | 0       | 0   |
| 1920 |       |         | 自然増        | 511    | 812            | -299  | 0   | -2  | 0       | 0   |
| 1920 | ]     | 1,310   | 社会増        | 675    | -73            | 557   | 144 | 5   | 42      | 0   |
| 1930 |       |         | 自然増        | 635    | 863            | -253  | 25  | 0   | 0       | 0   |
| 1930 | ]     | 525     | 社会増        | 258    | 18             | 103   | 120 | 6   | 11      | 0   |
| 1940 |       |         | 自然増        | 267    | 576            | -318  | 9   | 0   | 0       | 0   |
| 1940 | ]     | 437     | 社会増        | -123   | -527           | 47    | 217 | 8   | 132     | 0   |
| 1950 |       |         | 自然増        | 560    | 789            | -343  | 61  | 1   | -6      | 58  |
| 1950 | ]     | -110    | 社会増        | -591   | -1,086         | 32    | 195 | 21  | 255     | -8  |
| 1960 |       |         | 自然増        | 481    | 569            | -352  | 137 | 8   | -13     | 132 |
| 1960 | ]     | 112     | 社会増        | -521   | -858           |       | 354 |     |         | -16 |
| 1970 |       |         | 自然増        | 634    | 156            |       | 263 |     |         | 216 |

(単位 1000)

出所: Nathan Kantrovitz, *New York City Migration 1900—1960*, p. 2-24.

1900—1970 The Department of City Planning Office, Population Division

表 11〔外国生まれの白人〕 残存者100人当りの社会増加数の推計

| 最後の<br>年の年令 | 1900—1910 |     |     | 1910—1920 |     |     | 1920—1930 |     |     | 1930—1940 |     |     | 1940—1950 |     |     | 1950—1960 |     |     | 1960—1970 |     |     |
|-------------|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|
|             | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   |
| 10—14       | 382       | 805 | 860 | 235       | 238 | 231 | 537       | 547 | 528 | 142       | 140 | 144 | 302       | 304 | 300 | 209       | 218 | 200 | —         | 406 | 418 |
| 15—19       | 491       | 430 | 550 | 74        | 67  | 81  | 257       | 235 | 278 | 61        | 60  | 62  | 185       | 188 | 182 | 233       | 214 | 252 | —         | 165 | 168 |
| 20—24       | 437       | 426 | 447 | 145       | 118 | 169 | 251       | 229 | 273 | 69        | 55  | 83  | 178       | 147 | 207 | 278       | 218 | 339 | —         | 81  | 137 |
| 25—29       | 223       | 297 | 167 | 94        | 119 | 75  | 171       | 186 | 157 | 50        | 39  | 59  | 79        | 73  | 86  | 189       | 175 | 203 | —         | 173 | 176 |
| 30—34       | 87        | 131 | 53  | 20        | 34  | 7   | 62        | 91  | 39  | 11        | 13  | 10  | 45        | 46  | 43  | 70        | 90  | 55  | —         | 98  | 53  |
| 35—44       | 31        | 35  | 26  | 4         | 4   | 4   | 18        | 22  | 14  | 3         | 3   | 3   | 5         | 9   | 3   | 20        | 24  | 17  | —         | 25  | 16  |
| 45—54       | 9         | 5   | 14  | -3        | -5  | 0   | 2         | 1   | 4   | 0         | 0   | 1   | -4        | -3  | -4  | 0         | 0   | -1  | —         | 6   | 7   |
| 55+         | +1        | -3  | +5  | -5        | -8  | -3  | -5        | -8  | -2  | -2        | -2  | -2  | 8         | 7   | 9   | -14       | -12 | -15 | —         | -19 | -17 |
| 10才以上       | 77        | 79  | 74  | 21        | 20  | 22  | 31        | 31  | 30  | 5         | 4   | 6   | 2         | 2   | 1   | 1         | 2   | -1  | —         | —   | —   |

(単位 1000)

出所：N. Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p.2—(9)

米国の国勢調査と動態統計 (1960—1970)

表 12〔外国生まれの白人〕 の社会増加数の推計 (年令別、性別)

| 最後の<br>年の年令 | 1900—1910 |     | 1910—1920 |     | 1920—1930 |     | 1930—1940 |    | 1940—1950 |     | 1950—1960 |     | 1960—1970 |     |
|-------------|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|
|             | 男         | 女   | 男         | 女   | 男         | 女   | 男         | 女  | 男         | 女   | 男         | 女   | 男         | 女   |
| 0—9         | 36        | 36  | 12        | 12  | 14        | 14  | 4         | 4  | 8         | 8   | 10        | 10  | —         | —   |
| 10—14       | 34        | 35  | 17        | 16  | 11        | 10  | 4         | 4  | 4         | 4   | 9         | 9   | 11        | 11  |
| 15—19       | 51        | 67  | 18        | 22  | 22        | 27  | 6         | 7  | 6         | 6   | 7         | 9   | 11        | 12  |
| 20—24       | 100       | 109 | 42        | 65  | 52        | 64  | 7         | 10 | 9         | 14  | 12        | 18  | 11        | 18  |
| 25—29       | 107       | 80  | 68        | 55  | 81        | 78  | 12        | 21 | 12        | 15  | 15        | 18  | 18        | 21  |
| 30—34       | 71        | 36  | 35        | 8   | 68        | 37  | 10        | 8  | 8         | 10  | 14        | 12  | 16        | 12  |
| 35—44       | 54        | 37  | 9         | 8   | 59        | 34  | 9         | 8  | 10        | 4   | 13        | 11  | 13        | 12  |
| 45—54       | 7         | 14  | -9        | 0   | 2         | 7   | 0         | 2  | -7        | -10 | 0         | -1  | 3         | 5   |
| 55+         | -4        | 6   | -12       | -4  | -18       | -4  | -7        | -5 | -27       | -31 | -57       | -75 | -63       | -71 |
| 10才以上       | 420       | 384 | 168       | 170 | 277       | 253 | 41        | 55 | 15        | 12  | 13        | 1   | 20        | 20  |

出所：Nathan Kantrowitz, *New York City Migration* 1960—1970, p.2—(8),

米国の国勢調査

これは出生がなく高齢化によって死亡率が高まるからである。

④1930年までは移民の流入による増加が、自然減(死亡—出生)よりも多かったので、外国生まれの白人は増加していた。ところが1930年以降は外国生まれの白人の転入数が激減したのと逆に自然減が急増したため、外国生まれの白人は減少に向っている。

⑤移民の年齢構成で最も多いのは若年ことに20歳～29歳である。若年者が外国で就労し易いからである。

⑥移民として流入する人口の年齢は男性に比べ女性はやや若い。

⑦外国生まれの白人は19世紀中ばまではアイルランド系とドイツ系が主流を占めていたが、20世紀の中ばにはイタリア系とユダヤ系が主流となっ

た。

⑧1900年には外国生まれの白人の66.9%はマンハッタン区に住み、21.1%がブルックリン区に住んでいたが、これらの割合は減少に向い、1970年にはマンハッタンは22.4%にまで減少した。ブルックリン区では31.7%とごくわずか増加し、クインズ区が29%にまで増加した。ブロンクス区は1930～1960年まで20%代であったが、1970年には15.8%になった。これも住居が拡散し郊外化が進んだことを反映している。

⑨イタリア系は1900年には71.4%がマンハッタンに住んでいたが、1970年には7%に減った。かわってブルックリンが第1位で42.5%(1970年)も住んでおり、クインズ区にも27.7%もいる。

ドイツ系は1900年には55.9%がマンハッタン

表 13 ニューヨーク市の〔合衆国生まれの白人〕社会増加数の推計（1900—1970）（性別・年齢別）

| 最後の<br>年の年齢 | 期<br>間<br>性<br>別 | 1900—1910 <sup>a</sup> |     | 1910—1920 <sup>a</sup> |     | 1920—1930 <sup>a</sup> |     | 1930—1940 <sup>a</sup> |     | 1940—1950 <sup>a</sup> |      | 1950—1960 <sup>b</sup> |      | 1960—1970 <sup>b</sup> |      |
|-------------|------------------|------------------------|-----|------------------------|-----|------------------------|-----|------------------------|-----|------------------------|------|------------------------|------|------------------------|------|
|             |                  | 男                      | 女   | 男                      | 女   | 男                      | 女   | 男                      | 女   | 男                      | 女    | 男                      | 女    | 男                      | 女    |
| 10—14       |                  | -15                    | -13 | -19                    | -18 | -13                    | -12 | -1                     | 0   | -29                    | -26  | -85                    | -82  | -58                    | -55  |
| 15—19       |                  | -7                     | -2  | -6                     | -3  | 1                      | 4   | 6                      | 11  | -27                    | -20  | -60                    | -45  | -32                    | -24  |
| 20—24       |                  | 3                      | 13  | 4                      | 13  | 24                     | 30  | 18                     | 37  | -23                    | -12  | -36                    | -19  | -29                    | 5    |
| 25—29       |                  | 9                      | 9   | 8                      | 8   | 28                     | 26  | 20                     | 38  | } -57                  | -49  | -26                    | -41  | -7                     | -19  |
| 30—34       |                  | 0                      | -1  | 3                      | -4  | 6                      | -3  | -1                     | 0   |                        | -56  | -76                    | -28  | -49                    | -49  |
| 35—44       |                  | -16                    | -11 | -11                    | -10 | -17                    | -24 | -21                    | -20 | -71                    | -86  | -141                   | -151 | -89                    | -82  |
| 45—56       |                  | -13                    | -7  | -15                    | -10 | -19                    | -19 | -16                    | -12 | -39                    | -36  | -78                    | -68  | -47                    | -48  |
| 55+         |                  | -9                     | -4  | -15                    | -10 | -26                    | -23 | -20                    | -11 | -33                    | -40  | -59                    | -63  | -72                    | -96  |
| 10 歳以上      |                  | -49                    | -16 | -51                    | -35 | -16                    | -20 | -15                    | 44  | -279                   | -268 | -540                   | -546 | -362                   | -368 |

注：a プェルトリコ人を含む  
b プェルトリコ人を除く（単位 1000）  
出所：Nathan Kantrovitz, *New York City Migration 1900—1960*, p.3—(11),  
米国の国勢調査 1960—1970.

表 14 ニューヨーク市の〔合衆国生まれの白人〕の残存者 100 人当りの社会増加数の推計（性別・年齢別）

| 性別<br>期間<br>最後の<br>年の年齢 | 1900—1910 <sup>a</sup> |     |    | 1910—1920 <sup>a</sup> |     |     | 1920—1930 <sup>a</sup> |     |     | 1930—1940 <sup>a</sup> |     |    | 1940—1950 <sup>a</sup> |     |     | 1950—1960 <sup>b</sup> |     |     | 1960—1970 <sup>b</sup> |     |     |
|-------------------------|------------------------|-----|----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|
|                         | 計                      | 男   | 女  | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女  | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   |
| 10—14                   | -8                     | -8  | -7 | -8                     | -8  | -8  | -4                     | -5  | -4  | 0                      | -1  | 0  | -13                    | -13 | -13 | -30                    | -30 | -30 | —                      | -26 | -26 |
| 15—19                   | -3                     | -4  | -1 | -3                     | -4  | -1  | 1                      | 0   | 1   | 3                      | 2   | 4  | -11                    | -13 | -9  | -23                    | -26 | -20 | —                      | -16 | -12 |
| 20—24                   | 7                      | 2   | 11 | 5                      | 3   | 8   | 13                     | 11  | 14  | 11                     | 7   | 14 | -7                     | -10 | -5  | -16                    | -20 | -11 | —                      | -14 | 3   |
| 25—29                   | 9                      | 9   | 9  | 5                      | 6   | 5   | 16                     | 17  | 15  | 12                     | 8   | 15 | } -10                  | -11 | -9  | -18                    | -14 | -21 | —                      | -4  | -10 |
| 30—34                   | -1                     | 0   | -1 | -1                     | 3   | -4  | 1                      | 4   | -2  | 0                      | -1  | 0  |                        | -10 | -9  | -29                    | -26 | -32 | —                      | -20 | -31 |
| 35—44                   | -9                     | -10 | -7 | -6                     | -6  | -6  | -8                     | -7  | -9  | -6                     | -6  | -5 | -16                    | -15 | -16 | -30                    | -31 | -29 | —                      | -28 | -26 |
| 45—54                   | -11                    | -14 | -8 | -10                    | -11 | -8  | -12                    | -12 | -12 | -6                     | -7  | -5 | -12                    | -13 | -11 | -18                    | -21 | -16 | —                      | -16 | -13 |
| 55+                     | -10                    | -14 | -6 | -12                    | -16 | -10 | -16                    | -18 | -14 | -8                     | -11 | -5 | -14                    | -14 | -14 | -14                    | -16 | -13 | —                      | -16 | -15 |
| 10歳以上                   | -3                     | -5  | -2 | -4                     | -4  | -3  | -1                     | -1  | -1  | 1                      | -1  | 2  | -13                    | -14 | -13 | -22                    | -23 | -22 | —                      | —   | —   |

注：a プェルトリコ人を含む。  
b プェルトリコ人を除く（単位 1000）  
出所：N. Kantrowitz, *New York City Migration 1900—1960*, p.3—(12).  
米国の国勢調査と動態統計 1960—1970.

に住んでいたが、1970年には 37.9%に減った。これに反して1900年にはクインズ区には 6.3%住んでいたが、1970年には 43.1%（1970年）も住んでいる。（表 23）

3）合衆国生まれの白人の移動

ニューヨーク市への「外国生まれの白人」の純転入数は20世紀の初めから次第に減少した事実については先に述べた。

これらの移民は市の中心部のマンハッタン区から郊外へと絶えず拡散していった。この型は「合衆国生まれの白人」の場合にも基本的には同じものがみられる。両者の間の主な違いは「合衆国生まれの白人」の拡散が、「外国色生まれ」より早く

始まったことである。彼等の拡散は20世紀の初めから始まっている。

第10表によると、同じ白人でも「外国生まれ」と、「合衆国生まれ」では移住の型は全く異なっている。「合衆国生まれ」の白人の転出は20世紀の初めから見られ、大恐慌の時期をのぞき、次第に増加している。1940年以降は「合衆国生まれ」の白人の転出は膨大な数に上った。1900年から1910年の間に63,000人が流出してもニューヨーク市の人口に大きな影響はなかったが、1940年から1950年の間に527,000人、1950～1960年に100万を超える「合衆国生まれ」の人が転出した影響は大きかった。

表 15 ニューヨーク市黒人の推計社会増加（年齢別・性別）1900—1970

| 最後の<br>年の年齢 | 期間<br>性別 |    | 1900—1910 <sup>a</sup> |    | 1910—1920 <sup>a</sup> |    | 1920—1930 <sup>a</sup> |    | 1930—1940 <sup>a</sup> |     | 1940—1950 <sup>a</sup> |    | 1950—1960 <sup>b</sup> |     | 1960—1970 <sup>b</sup> |   |
|-------------|----------|----|------------------------|----|------------------------|----|------------------------|----|------------------------|-----|------------------------|----|------------------------|-----|------------------------|---|
|             | 男        | 女  | 男                      | 女  | 男                      | 女  | 男                      | 女  | 男                      | 女   | 男                      | 女  | 男                      | 女   | 男                      | 女 |
| 10—14       | 0        | 0  | 0                      | 1  | 3                      | 3  | 3                      | 4  | 6                      | 7   | 5                      | 6  | 24                     | 23  |                        |   |
| 15—19       | 1        | 2  | 2                      | 3  | 5                      | 7  | 5                      | 7  | 5                      | 8   | 4                      | 10 | 16                     | 39  |                        |   |
| 20—24       | 4        | 5  | 7                      | 9  | 13                     | 17 | 7                      | 16 | 11                     | 21  | 13                     | 21 | 11                     | 31  |                        |   |
| 25—29       | 5        | 6  | 8                      | 9  | 19                     | 20 | 12                     | 20 | 38                     | 48  | 18                     | 21 | 28                     | 40  |                        |   |
| 30—34       | 3        | 2  | 6                      | 5  | 13                     | 12 | 8                      | 11 |                        |     | 14                     | 13 | 20                     | 23  |                        |   |
| 35—44       | 2        | 1  | 5                      | 3  | 11                     | 10 | 3                      | 8  | 16                     | 16  | 10                     | 7  | 20                     | 21  |                        |   |
| 45—54       | —1       | 0  | —1                     | 1  | 1                      | 3  | —1                     | 3  | 2                      | 4   | 1                      | 2  | 5                      | 3   |                        |   |
| 55+         | 0        | 0  | 0                      | 0  | 1                      | 2  | 2                      | 4  | 1                      | 4   | 3                      | 5  | 6                      | 5   |                        |   |
| 10歳以上       | 14       | 17 | 27                     | 31 | 62                     | 75 | 39                     | 73 | 50                     | 109 | 69                     | 85 | 130                    | 186 |                        |   |

注：a プェルトリコ人を含む

b プェルトリコ人を除く（単位1000）

出所：Nathan Kantrovitz, *New York City Migration* 1900—1960, p. 4—(8),

米国の国勢調査 1960—1970.

### ① 性別と年齢別

20世紀の最初の10年間に49,000人の男性と16,000人の女性が転出した。年齢別にみると、10歳から19歳までと、30歳以上では転出しているが、20歳から29歳までの就業し易い年齢期はなお転入している。20歳から29歳までの（差引）転入による増加が、10歳代と30歳代以上の転出をある程度埋合わせたことになっているが、なお65,000（男女計）人が転出している。このような状態が大恐慌期まで続いた。（表13）

第2次大戦後になると、すべての年齢層において転出がみられるようになった。しかしその時期でさえ20歳～29歳の（差引）転出数は10代や30歳以上の（差引）転出数よりも少なかった。1950年から1960年の間に20歳～29歳層の「合衆国生まれ」の白人の（差引）転出数は122,000人であったが、35歳から44歳の年齢層では292,000人に達した。第2次大戦後、合衆国生まれの白人の転出はすべて年齢層に及び、数は膨大なものとなった。1940年から1950年の10年間に（差引）転出者は50万人を超え、1950年～1960年には100万人を超えた。ところが1960年～1970年になると人口の減退の勢いはやや衰えて738,000人となっている。

合衆国生まれの白人の郊外化は20世紀の初めから見られるものの、第2次大戦後に爆発的に進行した。

ニューヨーク市の人口に対して、合衆国生まれの白人の転出が市の人口に与える影響をみると

め、絶対数と比率でみると理解し易い。第13表によれば1900年～1910年の間に10歳～14歳の男性で15,000人が（差引）転出している。また第14表によると、100人につき8人が（差引）転出したことになる。これらの数字はむしろ安定した流れであるといえるが、第2次大戦後は途方もなく大きくなり、100人につき30に達し、人数は16万7,000人に達している。

### (3) 黒人の人口移動（転出・転入）

#### 1) 黒人の人口移動の歴史的傾向

1920年代に移民が制限されるまでは、市の人口増加の主な要因はヨーロッパからやって来る膨大な数の移民であった。しかし1920年代に入り移民の制限が始まると、移民に代わって南部黒人の移住とつづいてプェルトリコからの移民が重要な役割を果たすこととなった。

1900年には約6万人の黒人がニューヨークに住んでおり、それは全人口の1.8%であった。しかしながらニューヨーク市の黒人は今世紀の早い時期に急激に増加した。1900年から1920年の間に、黒人の人口は6万人から152,467人と2倍以上に増加するとともに、20年代だけで15万人から32万7,756人へとさらに倍増している。1940年までに黒人は45万8,444人となり全人口の6.0%に達した。このような黒人人口の急激な増加は、南部諸州と西インド諸島からの移民の巨大な流れによるものである。

さらに1940年から1960年までの間に45万8,000



表 16 ニューヨーク市の黒人の残存者100人当りの推計純社会増加（1900—1970）

| 期間<br>性別<br>最後の<br>年の場合 | 1900—1910 <sup>a</sup> |     |     | 1910—1920 <sup>a</sup> |     |     | 1920—1930 <sup>a</sup> |     |     | 1930—1940 <sup>a</sup> |     |     | 1940—1950 <sup>a</sup> |    |     | 1950—1960 <sup>b</sup> |    |    | 1960—1970 <sup>b</sup> |    |     |
|-------------------------|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|------------------------|-----|-----|------------------------|----|-----|------------------------|----|----|------------------------|----|-----|
|                         | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男   | 女   | 計                      | 男  | 女   | 計                      | 男  | 女  | 計                      | 男  | 女   |
| 10—14                   | 12                     | 8   | 15  | 22                     | 14  | 29  | 53                     | 50  | 56  | 23                     | 19  | 27  | 45                     | 44 | 46  | 15                     | 13 | 16 | —                      | 39 | 37  |
| 15—19                   | 85                     | 67  | 101 | 115                    | 105 | 123 | 142                    | 128 | 154 | 49                     | 41  | 56  | 45                     | 38 | 52  | 27                     | 17 | 37 | —                      | 30 | 108 |
| 20—24                   | 263                    | 245 | 277 | 337                    | 345 | 331 | 396                    | 415 | 382 | 130                    | 92  | 160 | 98                     | 78 | 115 | 84                     | 70 | 97 | —                      | 26 | 71  |
| 25—29                   | 222                    | 258 | 198 | 323                    | 378 | 285 | 412                    | 471 | 369 | 163                    | 145 | 176 | } 34                   | 42 | 29  | 91                     | 96 | 87 | —                      | 98 | 53  |
| 30—34                   | 89                     | 121 | 66  | 131                    | 164 | 107 | 154                    | 179 | 134 | 61                     | 56  | 65  |                        |    |     | 43                     | 56 | 34 | —                      | 65 | 54  |
| 35—44                   | 23                     | 29  | 18  | 33                     | 42  | 25  | 51                     | 55  | 46  | 13                     | 8   | 12  | 32                     | 39 | 27  | 11                     | 16 | 8  | —                      | 28 | 21  |
| 45—54                   | 9                      | 18  | 0   | 0                      | 8   | 10  | 17                     | 9   | 25  | 5                      | 3   | 14  | 7                      | 5  | 8   | 3                      | 22 | 3  | —                      | 8  | 3   |
| 55+                     | 7                      | 15  | 0   | 4                      | 5   | 12  | 22                     | 14  | 28  | 21                     | 13  | 28  | 10                     | 7  | 14  | 7                      | 6  | 7  | —                      | 7  | 4   |
| 年齢<br>10+               | 63                     | 61  | 64  | 78                     | 77  | 80  | 105                    | 105 | 108 | 40                     | 29  | 50  | 49                     | 47 | 51  | 23                     | 23 | 23 | —                      | —  | —   |

注：a プェルトリコ人を除いていない      b プェルトリコ人を除く（単位 1000）  
出所：N. Kantrovitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p.4—9,  
米国の国勢調査

表 17 ニューヨーク市に住む非白人男性の出生地別、年齢別、区別のパーセント（1960）

| 市・区<br>年齢  | ニューヨーク市<br>(実数) | 区別パーセント |       |        |        |      |
|------------|-----------------|---------|-------|--------|--------|------|
|            |                 | マンハッタン  | ブロンクス | リッチモンド | ブルックリン | クインズ |
| ニューヨーク州生まれ |                 |         |       |        |        |      |
| 計          | *232            | 33.2    | 15.8  | 1.1    | 35.5   | 14.2 |
| 4以下        | 62              | 31.8    | 15.1  | 1.0    | 38.6   | 13.6 |
| 5-9        | 48              | 31.4    | 16.0  | 1.3    | 36.3   | 15.0 |
| 10-14      | 35              | 31.9    | 16.7  | 1.4    | 35.1   | 15.0 |
| 15-19      | 18              | 33.2    | 17.0  | 1.4    | 34.5   | 13.9 |
| 20-24      | 13              | 35.0    | 16.5  | 1.0    | 35.4   | 12.1 |
| 25-29      | 12              | 33.1    | 17.4  | 1.0    | 34.6   | 14.0 |
| 30-34      | 12              | 33.2    | 16.8  | 0.8    | 33.1   | 16.2 |
| 35-39      | 10              | 35.3    | 15.0  | 0.8    | 32.8   | 16.1 |
| 40-44      | 6               | 38.9    | 15.6  | 0.8    | 31.2   | 13.4 |
| 45-49      | 5               | 40.1    | 15.2  | 0.9    | 28.9   | 14.7 |
| 50-54      | 4               | 43.1    | 12.5  | 1.5    | 29.2   | 13.6 |
| 55-59      | 3               | 44.7    | 12.2  | 0.7    | 31.3   | 10.9 |
| 60-64      | 2               | 48.3    | 12.3  | 0.0    | 28.0   | 11.3 |
| 65+        | 3               | 46.3    | 10.7  | 2.0    | 31.8   | 9.2  |
| 南部生まれ      |                 |         |       |        |        |      |
| 計          | *175            | 39.0    | 13.4  | 0.8    | 33.5   | 13.3 |
| 4以下        | 3               | 31.2    | 14.7  | 0.8    | 41.5   | 11.9 |
| 5-9        | 5               | 28.7    | 12.6  | 1.7    | 42.9   | 14.0 |
| 10-14      | 6               | 27.4    | 14.5  | 1.3    | 42.3   | 14.4 |
| 15-19      | 8               | 31.0    | 14.6  | 1.0    | 41.2   | 12.3 |
| 20-24      | 14              | 33.5    | 12.4  | 1.1    | 41.5   | 11.6 |
| 25-29      | 17              | 34.6    | 13.2  | 0.5    | 39.7   | 11.9 |
| 30-34      | 19              | 34.2    | 13.8  | 0.7    | 38.2   | 13.1 |
| 35-39      | 22              | 37.2    | 14.5  | 1.0    | 32.1   | 15.2 |
| 40-44      | 20              | 39.6    | 13.1  | 0.6    | 31.6   | 15.1 |
| 45-49      | 18              | 41.1    | 14.1  | 0.7    | 29.2   | 14.9 |
| 50-54      | 14              | 44.6    | 13.5  | 0.5    | 28.1   | 13.4 |
| 55-59      | 12              | 50.3    | 12.6  | 0.7    | 24.0   | 12.4 |
| 60-64      | 7               | 51.8    | 12.2  | 0.5    | 24.3   | 11.2 |
| 65+        | 11              | 52.0    | 10.9  | 0.8    | 25.8   | 10.5 |

注：切上てあるため必ずしも一致しない  
出所：Nathan Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p. 4—（12）.  
＊ 単位 1000

人から108万8,000人へと倍以上も増加している。1940年から1950年までに純転入数は約22万人に達したと推定される。続く1950年から1960年までの間は社会増数はやや減少したが、人口の自然増加が上まわっ増加したので、この10年間に33万人が増加する結果となっている。しかし、その半分より少し多い19万5,000人が社会増であった。1930年以前の状況と違って、西インド諸島からの転入者は少なかった。大部分はバージニア州からフロリダ州までのアメリカ南部諸州からの移住であった。

1960年から1970年までの間、ニューヨーク市の黒人の人口は53%も増加して166万8,000人に達した。この10年間の社会増による増加人口（32万4,000人）は1950年から1960年までのその1.7倍ほどである。1970年には黒人の人口は市の全人口の21.1%を占めるに到っている。さらに1990年には2,102,512人で28.5%に達している。

第10表に示されているように、黒人の転入者と白人のそれとの間には類似した点もあればやや異なったところもある。まず1920年頃までは黒人の転入者は数が少なかった。そして外国生まれの白人の純転入数は1930年頃から急激に減少しているのに対し、黒人の場合には1900年の約3万2,000人から1960～1970年には35万4,000人にまで増加している。

転入者の世代についてみると外国生まれの白人の転入者も黒人の転入者も大部分は20歳代、30歳代の若者であった。黒人の場合には女性も多かったが、外国生まれの白人ではそうではなかった。

2) 人口移動と階層および年齢

ニューヨーク市の黒人のコミュニティは外国生まれおよび他州生まれの転入者から構成されているが、移動を経験した人は黒人の場合にも白人の場合にも移動しなかった人より、高い階層にあったといえる。またニューヨーク市生まれで高い教育を受けた人は、そうでない人よりニューヨーク

市からの転出率が高いことを示す証拠が多い。同様に都市に移住する黒人はそうでない人より高い教育を得ようとしている。

表17は年齢による相違を示している。ニューヨーク生まれか南部生まれかを問わず、若い成人がより年上の年齢層よりも多くマンハッタン区以外の郊外的な区に住んでいる。このことは黒人コミュニティの中の相異は出生の場所よりも世代にもとづくものであることを示唆している。

(4) プエルトリコ人の人口移動

1) 一般的動向

スペイン-アメリカ合衆国戦争によってプエルトリコはアメリカ合衆国に割譲されたが、今世紀の30年代から、アメリカ本土への移住が急増した。この頃にはヨーロッパからの移民が制限されて少なくなったため、都市の労働力が不足しがちであった。この労働力不足を補う役割を担ったのがプエルトリコ人である。プエルトリコがアメリカ領であるところからアメリカ本土に自由に往来が出来るのでプエルトリコ人がアメリカの都市の労働力不足を補う役割を果たすことになった。

1910年にアメリカ合衆国には約1,500人のプエルトリコ人が存在した。1920年には7,000人、1940年には61,000人に急増している。

さらに1950年には一挙に4倍の245,000人となり、1960年には61.3万人に達した。そして1970年には81.7万人となったが、増加率は減退している。総人口に占める比率でみると、1920年にはわずか0.1%であったものが、1950年には3%、1960年には7.8%、1970年には9.9%に達した。

周知の通りプエルトリコ人の歴史はニューヨーク市で始まっている。1940年にはプエルトリコ人の90%はニューヨーク市に住んでいた。しかし1950年には80%になり、1970年には58%にまで落ちている。このことはプエルトリコ人も次第に合衆国全体に分散していることを示している。

しかしながらニューヨーク市のプエルトリコ人

表 18 ニューヨーク市のプエルトリコ人の人口 (1910～1970) 単位 1000

| 年度   | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950  | 1960  | 1970 |
|------|------|------|------|------|-------|-------|------|
| 人口   | 1    | 7    | 49   | 61   | 245   | 613   | 817  |
| 増加率  |      | 600  | 600  | 24.5 | 301.6 | 150.2 | 33.2 |
| 総人口比 |      | 0.1  | 0.7  | 0.8  | 3.1   | 7.8   | 10.4 |

出所 米国の国勢調査

表 19 ニューヨーク市のプエルトリコ人（出生地別）の社会増加者数の推計（年令別・性別）1900—1970

| 出生地<br>年<br>性別<br>最後の<br>年の年齢 | プエルトリコ生れ  |     |           |    | プエルトリコ系 2 世 |    |           |      |
|-------------------------------|-----------|-----|-----------|----|-------------|----|-----------|------|
|                               | 1950—1960 |     | 1960—1970 |    | 1950—1960   |    | 1960—1970 |      |
|                               | 男         | 女   | 男         | 女  | 男           | 女  | 男         | 女    |
|                               |           |     |           |    |             |    |           |      |
| 10—14                         | 17        | 17  | 8         | 8  | −1          | −1 | −2.2      | −3.1 |
| 15—19                         | 15        | 17  | 6         | 8  | −1          | 0  | −2.5      | −2.9 |
| 20—24                         | 20        | 22  | 5         | 13 | −1          | −1 | −2.5      | −0.5 |
| 25—29                         | 21        | 21  | 8         | 11 | −1          | −1 | +0.3      | +0.3 |
| 30—34                         | 13        | 11  | 1         | 3  | 0           | 0  | +0.2      | +0.2 |
| 35—44                         | 14        | 11  | −8        | −5 | 0           | 0  | 0         | −0.2 |
| 45—54                         | 4         | 4   | −5        | −3 | 0           | 0  | 0         | +0.3 |
| 55+                           | 3         | 5   | −3        | −4 | 0           | 0  | +0.3      | +0.6 |
| 10 才以上                        | 107       | 110 | 12        | 31 | −4          | −3 | −6.4      | −5.3 |

注：単位 1000

出所：米国の国勢調査

Nathan Kantrovitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p.5—(15).

表 20 ニューヨーク市のプエルトリコ人（出生地別）の残存者100人当りの社会増加者数の推計 1950—1970

| 最後の<br>年の年齢 | プエルトリコ生れ  |     |     |           |     |     | プエルトリコ系 2 世 |     |     |           |     |     |
|-------------|-----------|-----|-----|-----------|-----|-----|-------------|-----|-----|-----------|-----|-----|
|             | 1950—1960 |     |     | 1960—1970 |     |     | 1950—1960   |     |     | 1960—1971 |     |     |
|             | 計         | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   | 計           | 男   | 女   | 計         | 男   | 女   |
|             |           |     |     |           |     |     |             |     |     |           |     |     |
| 10—14       | 520       | 502 | 538 | —         | 166 | 160 | −8          | −9  | −6  | —         | −6  | −8  |
| 15—19       | 259       | 248 | 269 | —         | 44  | 69  | −9          | −14 | −4  | —         | −10 | −12 |
| 20—24       | 348       | 343 | 352 | —         | 26  | 64  | −24         | −27 | −21 | —         | −24 | −5  |
| 25—29       | 284       | 348 | 240 | —         | 37  | 46  | −17         | −19 | −16 | —         | 7   | 7   |
| 30—34       | 95        | 118 | 77  | —         | 6   | 9   | −17         | −14 | −20 | —         | 9   | 5   |
| 35—44       | 52        | 64  | 42  | —         | −16 | −9  | −17         | −10 | −23 | —         | 1   | −5  |
| 45—54       | 24        | 26  | 23  | —         | −17 | −10 | −22         | −2  | −40 | —         | 12  | 29  |
| 55+         | 33        | 30  | 35  | —         | −10 | −10 | +4          | −3  | +11 | —         | 93  | 122 |
| Ages 10 +   | 121       | 133 | 112 | —         | —   | —   | −13         | −14 | −12 | —         | —   | —   |

出所：N. Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p. 5—(16)

米国の国勢調査と動態統計

表 21 ニューヨーク市のプエルトリコ人（出世地別）の区別分布の比率

| 年<br>区 | 区別の比率  |       |        |        |      |
|--------|--------|-------|--------|--------|------|
|        | マンハッタン | ブロンクス | リッチモンド | ブルックリン | クインズ |

プエルトリコ生まれ

|      |      |      |     |      |     |
|------|------|------|-----|------|-----|
| 1930 | 77   | 3    | —   | 18   | 2   |
| 1940 | 70   | 13   | —   | 15   | 2   |
| 1950 | 57.8 | 24.3 | 0.3 | 16.0 | 1.6 |
| 1960 | 37.6 | 30.3 | 0.3 | 29.4 | 2.4 |

プエルトリコ系 2 世

|      |      |      |     |      |     |
|------|------|------|-----|------|-----|
| 1950 | 51.2 | 27.8 | 0.4 | 17.6 | 3.0 |
| 1960 | 35.1 | 31.0 | 0.6 | 29.5 | 3.8 |

出所：Nathan Kantrovitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p.5—(17).

の絶対数は移住によって増大している。プエルトリコ人の純増加は1960年まで続いた。1940年から1950年までの間に約16万人の社会増がみられたのに対し、1950年から1960年の10年間には21万4,000人が社会増となった。そして1950年代にはプエルトリコ人の転入数は黒人のそれを上回った。ところが、1960年と1970年の10年間にはプエルトリコ人の転入は激減し社会減は16,000人となった。プエルトリコ人の移民の主要な流れは1960年代に終わったように思われる。

#### 〔4〕郊外化とエスニック・マイノリティ

##### （1）アメリカ生まれの白人の住居地の拡散

1910年から1940年までの期間、市内の郊外化のプロセスを明確にたどることが出来る。郊外化はまず最初に「合衆国生まれの白人」の間に起こり、次いで「外国生まれの白人」がこれに続いた。

例えば、1930年に、「(本人が) 合衆国で生まれた白人」の18.5% (表24) が郊外的な区であるクインズ区に住んでいたが、「外国生まれの白人」の場合には11.4% (表23) がクインズ区に住んでいたにすぎない。さらに1930年には「親も合衆国生まれの白人」の場合には24.3%がクインズ区に住んでいたのに対して、親は外国生まれの白人では15.3%がクインズ区に住んでいるだけであった。

表25によると、この住居の拡散はマンハッタン区から外に向うものであることがわかる。この拡散は今世紀全般にわたり継続している。初めの10年間は合衆国生まれの白人がマンハッタンから転出したが、この傾向は継続し、1920年代には最大の数に達した。この移住の目的地はクインズ区とブロンクス区であろうと推測するのはごく自然なことである。というのは当時クインズ区とブロンクス区はマンハッタン区にとっては郊外であり、マンハッタン区から転出した人数とほぼ同じ数の人口を受入れているのである。

次に「親が外国生まれの白人」と「親も合衆国生まれの白人」では違ったパターンを示している。表26によると「親も外国生まれの白人」は今世紀の初めから大量にマンハッタン区から転出を始めたが、この白人は第一次大戦後には転出は減

少し始めた。「親が外国生まれの2世」の主な転出先はクインズ区ではなく、ブロンクス区やブルックリン区であったのに対して、「親もアメリカ生まれの子供」はクインズ区に転居したと思われるのは興味深いことである。ロナルド・フリードマンは、白人にしても黒人にしても移動する人は移動しない人達よりも教育程度が高く、威信度の高い職業についていると結論づけている<sup>14)</sup>。さらにトイーバーは同じデータを分析して移動者は教育程度が高く、富裕であると論じている<sup>15)</sup>。そこで中心都市(又は都心部)は得る富より失なうものが多い、郊外は失なう富より得る富の方が多い。

以上のところから次のように暫定的に結論をくだすことができる。

①親もアメリカ生まれの白人は親が外国生まれの白人よりも早く拡散を始めた。

②親たちよりも、2世の方がより早く拡散して住むようになった。

##### （2）外国生まれの白人の郊外化

ニューヨーク市の郊外化は1900年頃から始まり、1910年頃はブロンクス区とブルックリン区は郊外であった。それが1970年にはウエスチスターとナッソーが郊外である。1900年には外国生まれの白人(プエルトリコ人を除く)は大部分がマンハッタン区に住んでおり、ブルックリン区には3分の1ぐらいの人が住んでいた。1900年から1930年代までブルックリン区の白人の人口はほぼ安定して変化しなかったが1940年から少しずつ減少した。

しかし「外国生まれの白人」の全市的な住居の拡散が1930年(表22)ごろから始まった。そして第2次大戦の終わった頃までニューヨーク市の郊外であったクインズ区に「外国生まれの白人」が急増した。1960年までにクインズ区の「外国生まれの白人」の割合はマンハッタンと同じほどになり、1970年にはこれをはるかに上回った。(表22)

この白人の住居の拡散はヨーロッパからの移住がとまったからではなく、その数が少なくなったため、明確になったわけである。移民は第1次大戦以前は大部分、マンハッタン区とブルックリン区へ流入した。しかし1910年から1920年までの間

14) Ronald Freedman, *Recent Migration to Chicago*, P. 30ff.

15) Karl E. Taeuber and Alma F. Taeuber, *Negroes in Cities*, 1965, PP. 1-8.

表 22 ニューヨーク市の全人口と外国生まれの白人の区別分布 (1900—1970)

| 市・区<br>年 | ニューヨーク市 | ブロンクス | ブルックリン | マンハッタン | クインズ | リッチモンド |
|----------|---------|-------|--------|--------|------|--------|
| 1900     | *3,437  | 53.8  | 5.8    | 1.9    | 34.0 | 4.5    |
| 1910     | 4,767   | 48.9  | 9.0    | 1.8    | 34.3 | 6.0    |
| 1920     | 5,620   | 40.7  | 13.0   | 2.1    | 35.9 | 8.3    |
| 1930     | 6,930   | 26.9  | 18.3   | 2.3    | 36.9 | 15.6   |
| 1940     | 7,455   | 25.4  | 18.7   | 2.3    | 36.2 | 17.4   |
| 1950     | 7,692   | 24.8  | 18.4   | 2.4    | 34.7 | 19.7   |
| 1960     | 7,782   | 21.8  | 18.3   | 2.8    | 33.8 | 23.3   |
| 1970     | 7,896   | 19.5  | 18.6   | 3.7    | 33.0 | 25.2   |

外国生まれの白人

|      |        |      |      |     |      |      |
|------|--------|------|------|-----|------|------|
| 1900 | *1,261 | 66.9 | —    | 1.4 | 28.1 | 3.5  |
| 1910 | 1,928  | 57.2 | 7.7  | 1.3 | 29.6 | 4.1  |
| 1920 | 1,992  | 46.3 | 13.4 | 1.6 | 33.1 | 5.6  |
| 1930 | 2,295  | 28.0 | 20.8 | 1.7 | 37.9 | 11.6 |
| 1940 | 2,080  | 26.0 | 22.1 | 1.7 | 36.9 | 13.3 |
| 1950 | 1,784  | 25.8 | 21.0 | 1.7 | 35.3 | 16.2 |
| 1960 | 1,464  | 22.9 | 20.0 | 1.7 | 33.2 | 22.1 |
| 1970 | 1,437  | 21.4 | 15.8 | 1.8 | 31.7 | 29.0 |

\* 単位 1000

出所：1900—1960 Nathan Kantrovitz, *New York City Migration*, p.2—(10),  
米国の国勢調査

表 23 イタリア生まれとドイツ生まれの白人の区別分布 1900—1970

| 市・区<br>年 | ニューヨーク市<br>(1000) | 区 別    |       |        |        |      |
|----------|-------------------|--------|-------|--------|--------|------|
|          |                   | マンハッタン | ブロンクス | リッチモンド | ブルックリン | クインズ |

外国生まれ、イタリア

|      |     |      |      |     |      |      |
|------|-----|------|------|-----|------|------|
| 1900 | 145 | 71.4 | —    | 1.0 | 25.6 | 2.1  |
| 1910 | 341 | 58.6 | 7.4  | 1.2 | 29.5 | 3.3  |
| 1920 | 391 | 47.2 | 10.1 | 2.2 | 35.4 | 5.1  |
| 1930 | 440 | 26.7 | 15.4 | 2.5 | 43.9 | 11.4 |
| 1940 | 409 | 21.7 | 17.6 | 2.6 | 44.9 | 13.4 |
| 1950 | 344 | 17.9 | 18.1 | 2.9 | 44.7 | 16.4 |
| 1960 | 858 | 10.4 | 18.9 | 3.8 | 43.4 | 23.5 |
| 1970 | 212 | 7.5  | 18.5 | 3.8 | 42.5 | 27.7 |

外国生まれ、ドイツ

|      |     |      |      |     |      |      |
|------|-----|------|------|-----|------|------|
| 1900 | 322 | 55.9 | —    | 1.7 | 33.1 | 6.3  |
| 1910 | 278 | 42.4 | 13.2 | 1.9 | 31.6 | 10.9 |
| 1970 | 98  | 27.9 | 11.5 | 1.8 | 14.1 | 43.1 |

出所：Nathan Kantrovitz, *New York City Migration*, 1960—1970, p.2—(12),  
米国の国勢調査

表 24 ニューヨーク市の合衆国生まれの白人（非プエルトリコ人）の区別分布 1900—1960

| 市・区<br>年           | ニューヨーク市<br>(単位 1000) | 区 別               |       |        |        |      |
|--------------------|----------------------|-------------------|-------|--------|--------|------|
|                    |                      | マンハッタン            | ブロンクス | リッチモンド | ブルックリン | クインズ |
| 合衆国生まれの白人合計        |                      |                   |       |        |        |      |
| 1900 <sup>b</sup>  | 2,109                | 55.1 <sup>a</sup> | a     | 2.2    | 37.6   | 5.0  |
| 1910 <sup>b</sup>  | 1,741                | 42.4              | 10.1  | 2.2    | 37.9   | 7.4  |
| 1920 <sup>bd</sup> | 3,468                | 35.9              | 13.3  | 2.4    | 38.2   | 10.1 |
| 1930 <sup>bd</sup> | 4,294                | 23.1              | 18.0  | 2.7    | 37.7   | 18.5 |
| 1940 <sup>b</sup>  | 4,897                | 21.2              | 18.6  | 2.8    | 37.2   | 20.3 |
| 1950 <sup>c</sup>  | 5,106                | 19.0              | 18.0  | 3.0    | 36.4   | 23.6 |
| 1960 <sup>c</sup>  | 4,590                | 15.7              | 17.0  | 4.0    | 34.6   | 28.6 |

親も合衆国生まれの白人

|                    |       |                   |      |     |      |      |
|--------------------|-------|-------------------|------|-----|------|------|
| 1900 <sup>b</sup>  | 737   | 49.1 <sup>a</sup> | a    | 3.1 | 42.1 | 5.6  |
| 1910 <sup>b</sup>  | 921   | 37.4              | 10.0 | 3.1 | 40.7 | 8.7  |
| 1920 <sup>b</sup>  | 1,165 | 33.3              | 11.4 | 3.3 | 39.2 | 12.8 |
| 1930 <sup>bd</sup> | 1,505 | 25.3              | 14.2 | 3.5 | 32.7 | 24.3 |

親は外国生まれの白人または親の一方は外国生まれの白人

|                    |       |                   |      |     |      |      |
|--------------------|-------|-------------------|------|-----|------|------|
| 1900 <sup>b</sup>  | 1,372 | 58.4 <sup>a</sup> | a    | 1.8 | 35.2 | 4.7  |
| 1910 <sup>b</sup>  | 1,820 | 45.0              | 10.2 | 1.8 | 36.5 | 6.6  |
| 1920 <sup>b</sup>  | 2,303 | 37.3              | 14.2 | 2.0 | 37.8 | 8.8  |
| 1930 <sup>bd</sup> | 2,789 | 21.8              | 20.1 | 2.3 | 40.4 | 15.3 |

注 : a マンハッタンとブロンクス合計    b プエルトリコ人も含む  
c プエルトリコ人を除く  
d 1930 年にメキシコ人を非白人を白人に分類変えていない。  
出所 : Nathan Kantrovitz, *New York City Migration* 1900—1960, p.3—(13).

表 25 合衆国生まれの白人の推計社会増加者数と10才以上の残存者100人当りの社会増加者数（1900—1960）

| 市・区<br>年           | ニューヨーク市           | マンハッタン            | ブロンクス | リッチモンド | ブルックリン | クインズ |
|--------------------|-------------------|-------------------|-------|--------|--------|------|
| 転入者数 (単位 1000)     |                   |                   |       |        |        |      |
| 1910 <sup>b</sup>  | -64               | -101 <sup>a</sup> | a     | 1      | -9     | 44   |
| 1920 <sup>b</sup>  | -86               | -197              | 59    | 5      | -27    | 74   |
| 1930 <sup>b</sup>  | -36               | -394              | 129   | 9      | -63    | 281  |
| 1940 <sup>b</sup>  | 29                | -27               | 3     | 5      | -41    | 89   |
| 1950 <sup>b</sup>  | -369 <sup>f</sup> | -43               | -100  | -6     | -249   | +29  |
| 1960 <sup>cd</sup> | -1,114            | -280              | -244  | -4     | -521   | -74  |

残存者100人当りの純転入者数

|                   |     |                 |     |    |     |    |
|-------------------|-----|-----------------|-----|----|-----|----|
| 1910 <sup>b</sup> | -3  | -9 <sup>a</sup> | a   | 2  | -1  | 46 |
| 1920 <sup>b</sup> | -4  | -19             | 23  | 10 | -3  | 40 |
| 1930 <sup>b</sup> | -1  | -33             | 29  | 11 | -5  | 84 |
| 1940 <sup>b</sup> | 1   | -3              | 0   | 4  | -3  | 12 |
| 1950 <sup>b</sup> | -8  | -4              | -11 | -5 | -14 | 3  |
| 1960 <sup>c</sup> | -22 | -29             | -27 | -2 | -28 | -6 |

注 : a マンハッタンとブロンクス    b プエルトリコ人を除いていない  
c Backward Census Survival Ratios. で計算したもの    d プエルトリコ人を除く  
e この割合は Forward Survival Ratio with denominators expected Survivors. から得られたものでない。  
f プエルトリコ人を除いていない。  
出所 : N. Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p.3—(14)

Table 26 ニューヨーク市の10歳以上の合衆国生まれの白人（非プエルトリコ人）の推計社会増加者数（1900—1930）

| 市・区<br>最終年の年齢 | ニューヨーク市 |                |        |        |      |        |
|---------------|---------|----------------|--------|--------|------|--------|
|               | ニューヨーク市 | ブロンクス          | ブルックリン | マンハッタン | クインズ | リッチモンド |
| 親もアメリカ生まれの白人  |         |                |        |        |      |        |
| 1910          | 9       | 2 <sup>a</sup> | a      | 1      | −7   | 16     |
| 1920          | 48      | 4              | 9      | 3      | 1    | 29     |
| 1930          | 40      | −42            | 24     | 3      | −68  | 123    |

親は外国生まれか一方の親が外国生まれ

|      |      |                  |     |   |     |     |
|------|------|------------------|-----|---|-----|-----|
| 1910 | −31  | −76 <sup>a</sup> | a   | 1 | 14  | 30  |
| 1920 | −106 | −189             | 54  | 3 | −18 | 46  |
| 1930 | −77  | −352             | 106 | 7 | 5   | 158 |

注： a マンハッタンとブロンクスの合計      単位 1000  
出所： Nathan Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p. 3—(16)

表 27 5 才以上のプエルトリコ人を出生地別に見た 1960 年の住所の区別パーセント

| 移動          | 生れた場所<br>区別 | プエルトリコ生まれ |         |        |         |        | プエルトリコ系 |        |        |        |       |
|-------------|-------------|-----------|---------|--------|---------|--------|---------|--------|--------|--------|-------|
|             |             | マンハッタン    | ブロンクス   | リッチモンド | ブルックリン  | クインズ   | マンハッタン  | ブロンクス  | リッチモンド | ブルックリン | クインズ  |
| 5 才以上の人数    |             | 157,342   | 127,480 | 1,416  | 122,532 | 10,387 | 34,722  | 32,320 | 915    | 27,039 | 3,951 |
| パーセント       |             |           |         |        |         |        |         |        |        |        |       |
| 計           |             | 100       | 100     | 100    | 100     | 100    | 100     | 100    | 100    | 100    | 100   |
| 非移動         |             | 78.3      | 68.0    | 44.8   | 68.2    | 55.6   | 93.1    | 81.7   | 52.8   | 84.4   | 67.5  |
| 州内移動        |             | 3.5       | 13.8    | 30.6   | 11.2    | 34.4   | 4.1     | 14.9   | 33.3   | 12.1   | 29.7  |
| 州外から        |             |           |         |        |         |        |         |        |        |        |       |
| 他の州         |             | 0.8       | 1.0     | 0.5    | 1.0     | 1.1    | 0.9     | 1.1    | 2.0    | 1.0    | 1.2   |
| プエルトリコ      |             | 16.0      | 15.1    | 7.3    | 17.9    | 8.0    | 1.2     | 1.0    | 0.0    | 1.5    | 0.4   |
| その他         |             | 0.4       | 0.3     | 2.6    | 0.5     | 0.3    | 0.2     | 0.4    | 0.7    | 0.2    | 0.4   |
| 1955年の住所が不明 |             | 0.9       | 1.3     | 14.3   | 1.2     | 0.6    | 0.6     | 0.9    | 11.3   | 9.0    | 0.8   |

注： a 1960 年に同じ家に住んでいたか、1955 年と同じカウンティにいた  
出所： Nathan Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p. 5(18).

〔ニューヨーク市のプエルトリコ人〕

表 28 1950 年の人口に対するパーセントで示した 1950 年から 1960 年までの推計社会増加者数（出生地別、区別）

| 出生地別<br>市・区 |     | 1950 年の人口 | プエルトリコ生まれ                     |       | プエルトリコ系   |                                              |
|-------------|-----|-----------|-------------------------------|-------|-----------|----------------------------------------------|
|             |     |           | 1950 年の人口に対するパーセン<br>トで示した転入者 |       | 1950 年の人口 | 1950 年の人口に<br>対するパーセン<br>トで示した 10<br>才以上の転入者 |
|             |     |           | 10才以上の人                       | 全員    |           |                                              |
| ニューヨーク市     | 計   | 187,586   | 117.7                         | 136.2 | 58,720    | −13.3                                        |
|             | 白人  | 173,115   | 127.0                         | 146.3 | 53,560    | −11.0                                        |
|             | 非白人 | 14,471    | 7.1                           | 15.6  | 5,160     | −37.8                                        |
| マンハッタン      | 計   | 108,447   | 41.7                          | 53.8  | 30,060    | −44.4                                        |
|             | 白人  | 97,944    | 48.9                          | 61.5  | 26,760    | −43.1                                        |
|             | 非白人 | 10,503    | −25.1                         | −18.6 | 3,300     | −55.2                                        |
| ブロンクス       | 計   | 45,599    | 174.7                         | 194.3 | 16,325    | 6.7                                          |
|             | 白人  | 43,644    | 178.4                         | 198.3 | 15,395    | 8.0                                          |
|             | 非白人 | 1,955     | 92.3                          | 105.4 | 930       | −14.3                                        |
| リッチモンド      | 合計  | 535       | 228.0                         | 249.7 | 205       | 186.8                                        |
| ブルックリン      | 計   | 29,949    | 291.5                         | 331.6 | 10,350    | 22.4                                         |
|             | 白人  | 28,207    | 303.7                         | 345.3 | 9,605     | 25.3                                         |
|             | 非白人 | 1,742     | 92.6                          | 108.8 | 745       | −14.8                                        |
| クインズ        | 合計  | 3,056     | 242.5                         | 258.6 | 1,780     | 97.2                                         |

出所： Nathan Kantrowitz, *New York City Migration*, 1900—1960, p 5—(20).

に、中心部の区から居住区への強い移動の傾向が現われた。第2次大戦後、この傾向はブロンクス区とブルックリン区にも影響し、そこからクインズ区に向うようになり、さらに市域を越えてニューヨーク大都市圏の郊外部に向うようになった。

この傾向はイタリア系にもドイツ系にもアイルランド系にも等しく見られる。

### (3) 黒人の郊外化

黒人の郊外化は白人にかなり遅れて始まった。1950年にクインズ区に外国生まれの白人は17.1%も住んでいたが、黒人は1970年になっても15.4%にすぎなかった。

黒人の場合には第2次大戦後まではマンハッタン区から他の区に移住する人は限られていた。その後ようやく多数の黒人がクインズ区のような郊外的な区に移動するようになった。

中心区に転入する黒人と白人など郊外に分散する人口がほぼ相い補なう関係にある。黒人の転入は白人の転出によって出来た空白を埋める役割を果たしている。生態学的に言えば継承 (succession) の過程が進行しているのである。

黒人の分散は今世紀初めから始まった白人の郊外化に随伴する形で進行している。多分、大戦後、白人がナッソー・カウンティへ向う時、黒人はクインズ区に家を求めたと言えるであろう。

### (4) プエルトリコ人の郊外化

かつてプエルトリコ人の大部分はマンハッタン区に來住した。それが近年では居住に適した区や大都市圏の郊外へと拡散している。

#### 1) 移民と2世の郊外化

表19は1960年～1970年の時期になるとプエルトリコ人の「移民」と「2世」では居住地が異なっていることを示している。「移民」は依然としてニューヨーク市に入ろうとしているが、「2世」は市から離れ始めた。例えば、1950～1960年の10年間に20歳～24歳の男性については差引2万人がプエルトリコからニューヨーク市に入ったが、移民の2世は1,000人が市から転出した。また「2世」の20歳～24歳の男子にはかなり(100につき27)の転出がみられる。(表20)

#### 2) 区別の動向

マンハッタンの中心から市内の他の区に移住が

始まった。表21は1930年から全プエルトリコ人の住居の拡散を示している。その後、「移民」はまだマンハッタン区に一番多く37.6%住んでいるが、「子供達」はブロンクス区とブルックリン区にも住み、クインズ区も増加の傾向にある。

表27によるとマンハッタン区のプエルトリコ人で州外から移動した人は大部分(16.0%)はプエルトリコからの移住であり、州内(大部分はマンハッタン)は3.5%と少なかった。他方、居住地(例えばクインズ区)のプエルトリコ人はプエルトリコから來住した人(8.0%)と少なく、州内主にマンハッタン(34.4%)から移住した人が多い。

### 3) プエルトリコ人の郊外化

市の中心部から居住に適した郊外区へと拡散が進行しているとの見方がデータによって裏づけられている。ブロンクス区とブルックリン区はマンハッタン区に比較すると定住者(非移動者)がやや少なく、ニューヨーク州内の各地からの移住が少し多い。しかしプエルトリコからもマンハッタン区と同じ位來住している。クインズ区は定住者が比較的少なく、州内の移動者が多く、プエルトリコから直接來住する人もいくらかいる。(表27)

プエルトリコ島からニューヨーク市の居住に適した郊外区への移住は、直接來住する人とマンハッタン区(またはブルックリン区)にまず來住してから後、他の区に移る人に分れる。さらにクインズ区への來住はマンハッタン区やブルックリン区を経由して來る人が多い。

しかしながら「プエルトリコ系2世」になると様相はかなり違っている。マンハッタン区には実質的に転入者はほとんどいない。ブロンクス区とブルックリン区にはまだ若干転入している。そしてクインズ区とリッチモンド区はニューヨーク州内からの移住者を受入れている。したがってこれはマンハッタンからブロンクス区やブルックリン区への移住であると推察出来よう。

1950年の人口に対する移民のパーセンテージが表28に示されている。プエルトリコからの移民が、マンハッタンでは53.8%増加しているが、ブルックリン区では331.6%にもなっている。そしてその2世はマンハッタンから44.6%も転出している。



プエルトリコの移動を要約すると、第1にプエルトリコからの移住は1910年から1960年まで増加した。

第2に、1960年代に入ると純転入者数は激減した。

第3に、以前は殆んどの移民はマンハッタン区に來住したが、最近では郊外区にやってくる。

第4に、プエルトリコ人はマンハッタンから郊外化している。

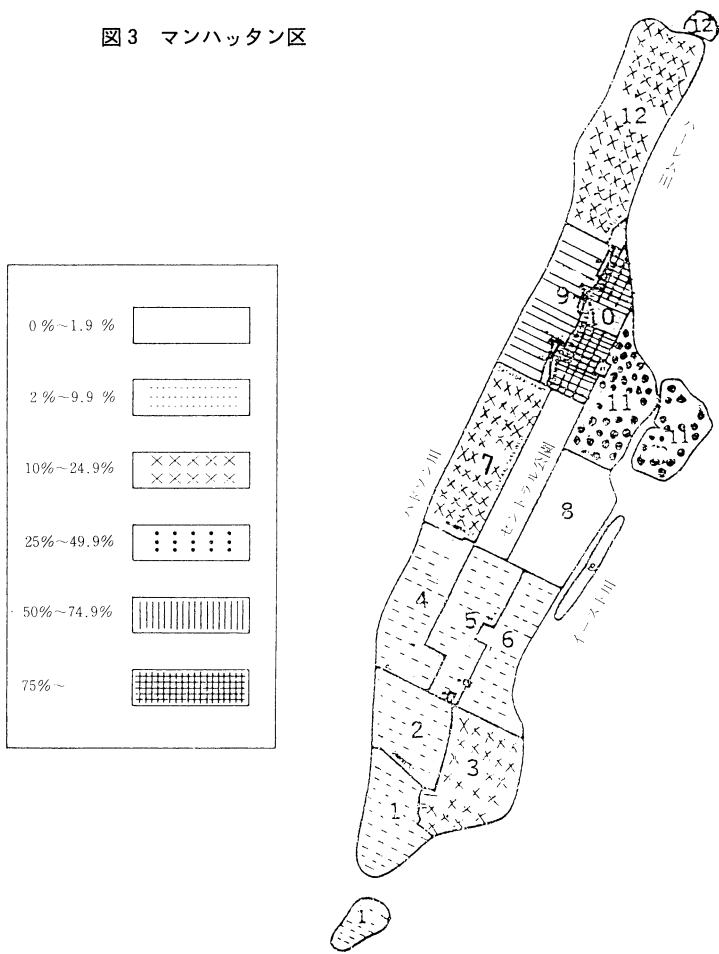
第5に、プエルトリコの2世は親たちよりも、居住地に適した郊外的な区に移動している。

[5] 居住地の隔離とエスニック・コミュニティ

ニューヨーク市にはエスニック・マイノリティが居住して以来、長い歴史があるにもかかわらず、これらの人達についての居住地パターンについての科学的検討や報告書は少ない。

ネーザン・カントロヴィッツはこれについて、「これまでニューヨーク市のどこに黒人やプエルトリコ人がまとまって住んでいるかを調べた地理的な研究は存在しない。その結果、これらのコミュニティがどのように発展したかについてきわめてあいまいな印象に頼っている著者が多い。このようなわけでコミュニティのどこに富裕な人や貧しい人が住んでいるのか、広い視野で見きわめることが出来ない。そこでマンハッタンハーレ

図3 マンハッタン区



総人口に対する黒人の割合、1970年（コミュニティ・プランニング・ディストリクトによる区分）

ムのような場所を活性化する際に、それはより大きな黒人コミュニティの一部にすぎないためにそこだけを変えることは出来ないのか、それとも自己完結的な地区であるから変えることが出来るのか、といったことについても考慮することなしに公共政策が決定されるという、驚ろくべき結果となっている」<sup>16)</sup>と指摘している。

## (1) 黒人の居住地

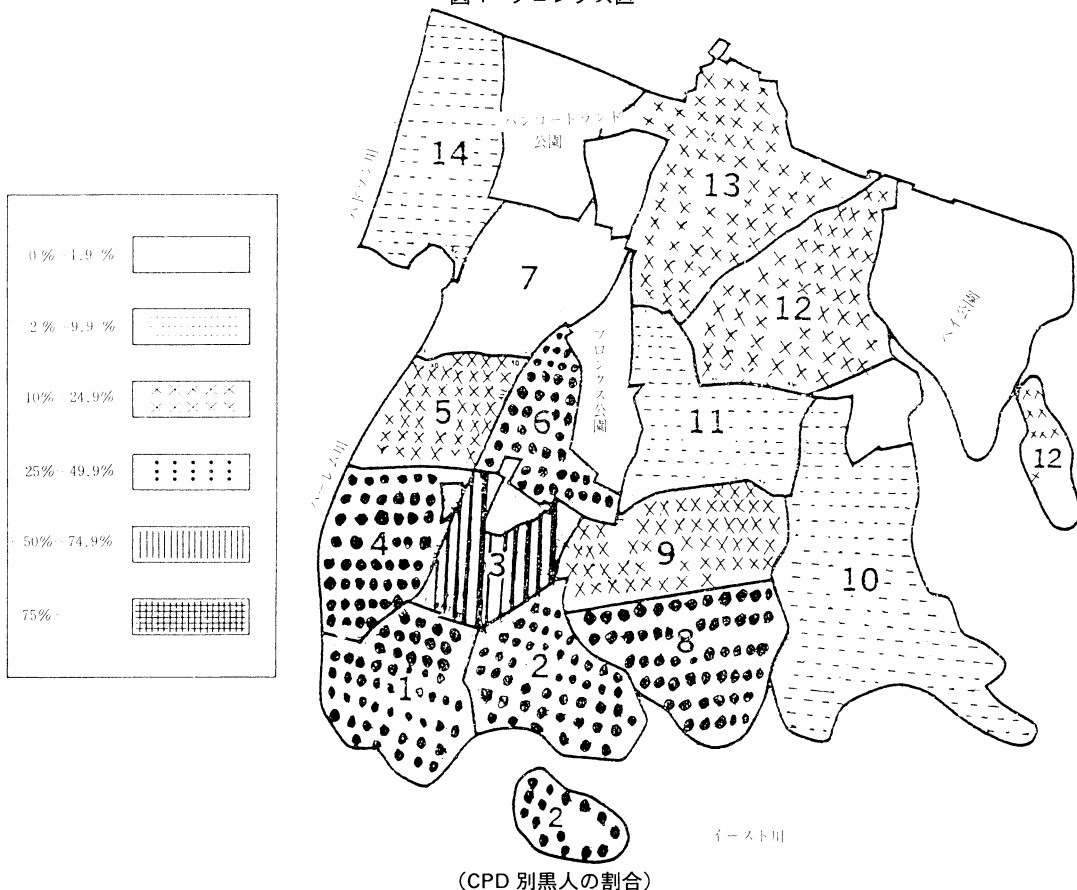
### 1) 市全域

ニューヨーク市の黒人は、今世紀に入る以前から今日、黒人人口が集中しているいくつかの核をなす居住地へ定住を始めている。これらの居住地の人口の動向をみれば発展の方向が明らかになる。ハーレムでは1910年の初めごろから人口の増加が始まった。そこには黒人が数多く住んでいる地区があり、これに接して、それほどでないに

てもかなりの数の人が住んでいる地区がある。それから年数が経つうちに変化し、セントラル・ハーレムは均等に黒人が多く住む地区となり、他方、外周部にあるブルックリン区やクインズ区では黒人が比較的に少なく住んでいる地域となった。

1910年にマンハッタンではサンジュアン・ヒル（セントラル・パークの南西の端の西）とハーレムはほとんどが黒人だけの地区となった。勿論この他にも黒人の多い地区はある。ブルックリン区のベッドフォード＝スタイベサンでは人口の4分の1以上が黒人である。しかし黒人が分散して住んでいる場所がニューヨーク市のなかの他の地区にも存在する。その後、黒人の地区も割合も増加したのに対し、これらの地区の一部では黒人人口が減り、とうとう消滅した地区もある。

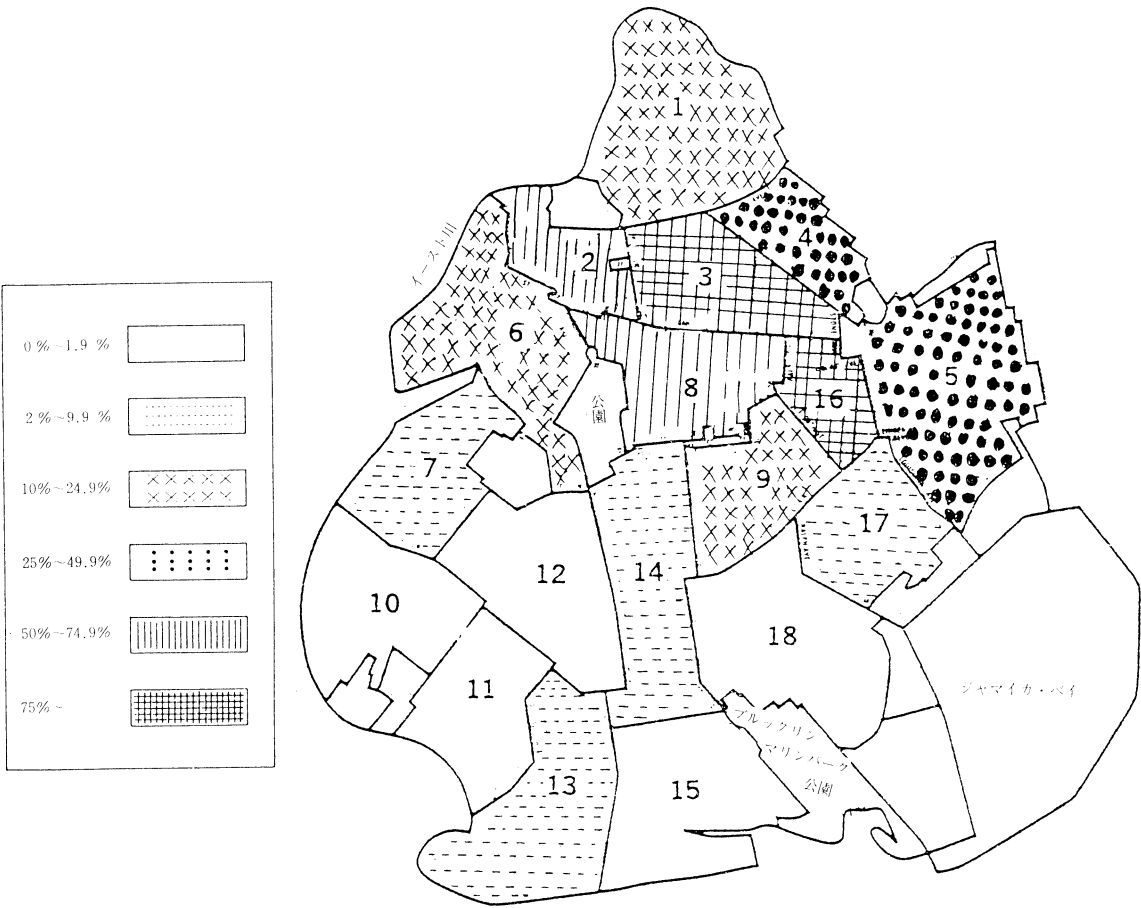
図4 ブロンクス区



16) Nathan Kantrowitz, *Negro and Puerto Rican Population of New York City in the Twentieth Century*, 1969, P. 1.

図5 ブルックリン区

プエルトリコ人の割合 (CPD 別) 1970年



2) マンハッタン区

1910年までに黒人の小さな孤立した居住区がマンハッタンの西海岸沿いに出来てはいたが、ことに二つの大きな居住区がセントラルパークの北に存在した。それはサンジュワンヒルとハーレムである。その後、ことに1950年～1960年頃、黒人の居住区は再び拡大した。

3) ブロンクス区

1910年にはマンハッタン区からハーレム川の向う側にあるブロンクス区に黒人の居住地が見られる。この元の居住地は、その後、輸送路ぞいに拡大した。1960年から1970年の間にブロンクス区の黒人の人口は2倍にふえた。マンハッタン区のハーレムの黒人への過度の集中はブロンクス区の新しい黒人人口のセンターの形成によって緩和されている。

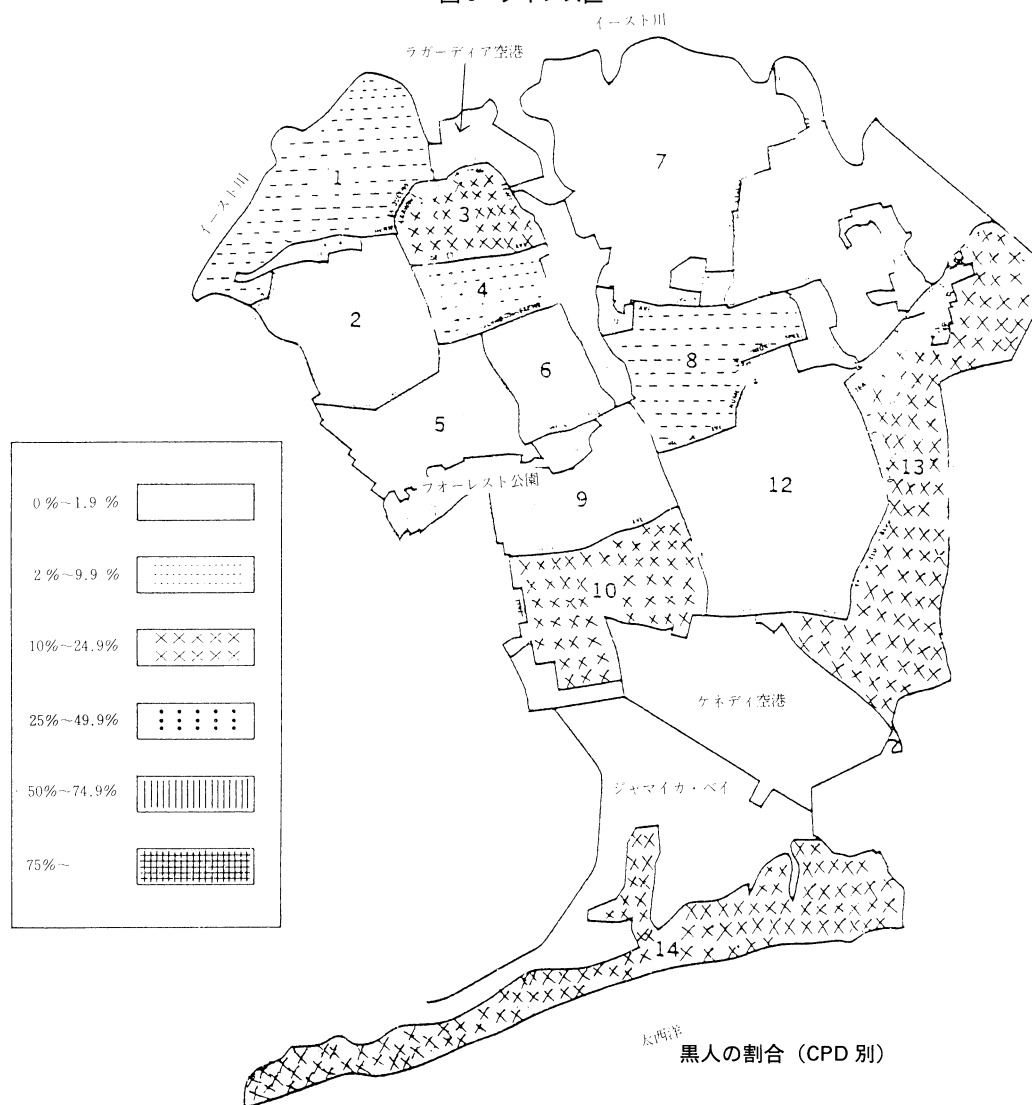
4) ブルックリン区

ブルックリン区は10年毎にみてどの時期にも、いくつかの地区に小さな黒人居住地が見られるのは興味深いことである。1910年当時は、ブルックリン区はマンハッタン区以外では、大規模な黒人居住区を持つ唯一の区であった。この居住地は次第に成長し、最近のベッドフォード＝スタイベサンとなった。この居住地は、多分、主な公共輸送路線に沿って発展して来た。1940年までに町の75%が黒人で占められる地区が出現した。

5) クインズ区

1910年にはクインズ区はまだ村落の様相が色濃く残っており、ブルックリン区との境目、あるいはイースト・リバー沿いに町的な地区が存在するにすぎなかった。この時代にはクインズ区には小規模の黒人人口が農村地区の中に住んでいた。しかし1920年までには黒人の居住がマンハッタン区からイーストリバーの向う側にあたるクインズ区

図 6 クインズ区



の古い都市的地域のなかに目立って来た。クインズ区の黒人人口が拡散したことを説明するのは困難であるが、ブルックリン区がそうであるように、すべての今日の黒人の定住地は1910年から1920年までに始まったと結論することは妥当なことであろう。

1930年までにこの地域に黒人人口の高密度に集中した地区といくらか集中した地区への分化が始まり、1950年にそれが成長し、1960年までにラガーディア空港の近くのジャクソンハイツとクインズ区の中央部に位置するセント・アルバンス＝ジャマイカを見るようになった。

## 6) リッチモンド区

リッチモンド区には黒人はまばらに住んでいたが、1910年のはじめから黒人の定住したところがあった。

### (2) プェルトリコ人の居住地

1920年にニューヨーク市に7,000人のプェルトリコ人が居た。しかしマンハッタン区の中のプェルトリコ人の初期の集中は1930年頃から分散が始まる。

一般的に1950年から1960年の間、プェルトリコ人の定住は黒人居住区に隣接した場所に位置した。例えば、黒人ハーレムのすぐ側の東側にプエ

図7 リッチモンド区

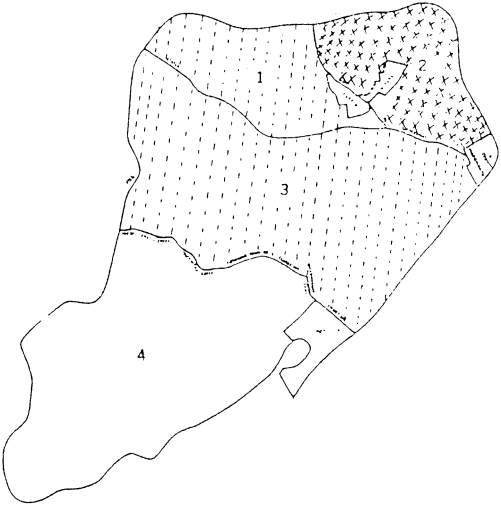
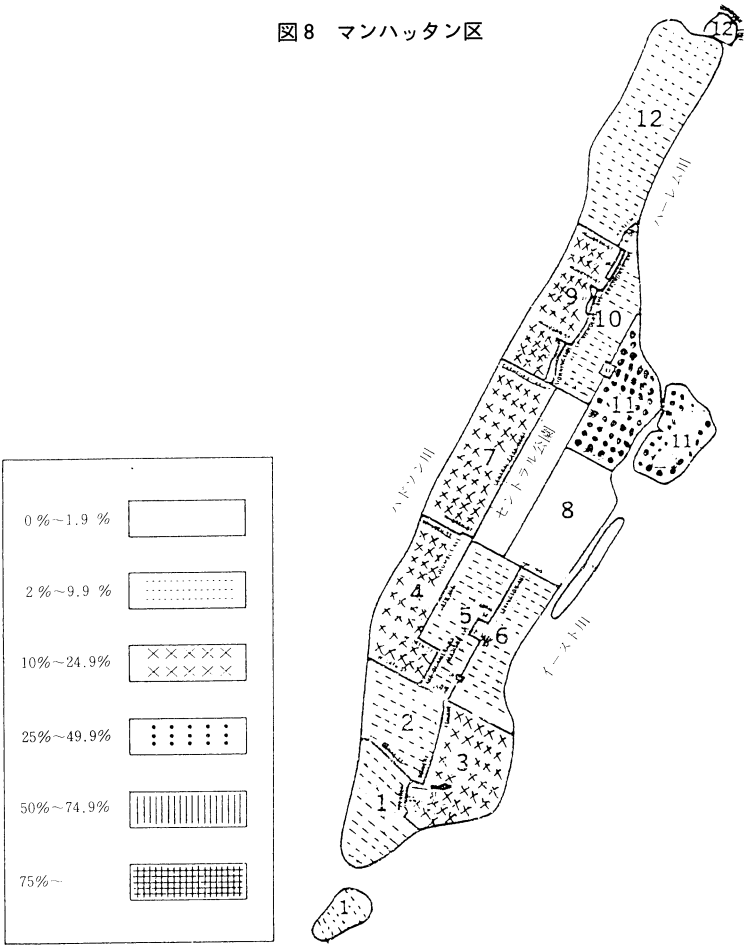


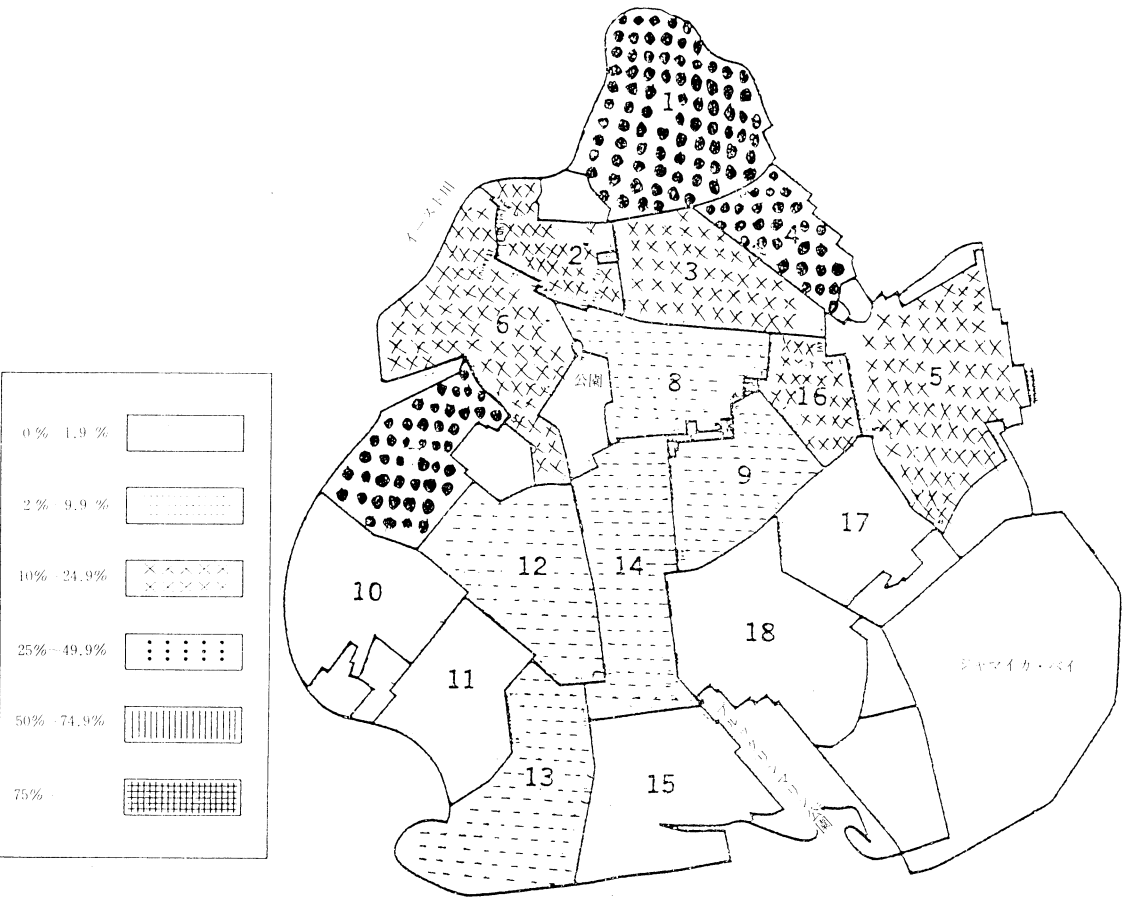
図8 マンハッタン区



総人口に対するプエルトリコ人の割合（1970年）（CPD別）



図 10 ブルックリン区  
プエルトリコ人の割合 (CPD 別) 1970 年



[6] エスニック・コミュニティ——ハーレムの変容

かつてアイルランド人やオランダ人の移民の居住地であったハーレムは、続いてユダヤ人の居住地となり、今日では黒人やプエルトリコ人の居住地となった。建物は大きく、大理石の廊下や壁のデザインなどからすると、かなり複雑で富裕な生活が営まれた建物であることを示している<sup>17)</sup>。

第1次大戦後に南部から北上した黒人が増加し、ハーレムに集まった。1909年にはNAACP (黒人の地位向上協会) がハーレム地区の黒人の権利を主張するための活動を始めている。

ハーレムはセントラルパークの北の端110丁目から北に178丁目のハーレム川とハドソン川に囲まれた、アメリカ最大の黒人居住区でニューヨー

ク市の黒人の約半数がここに住んでいる。

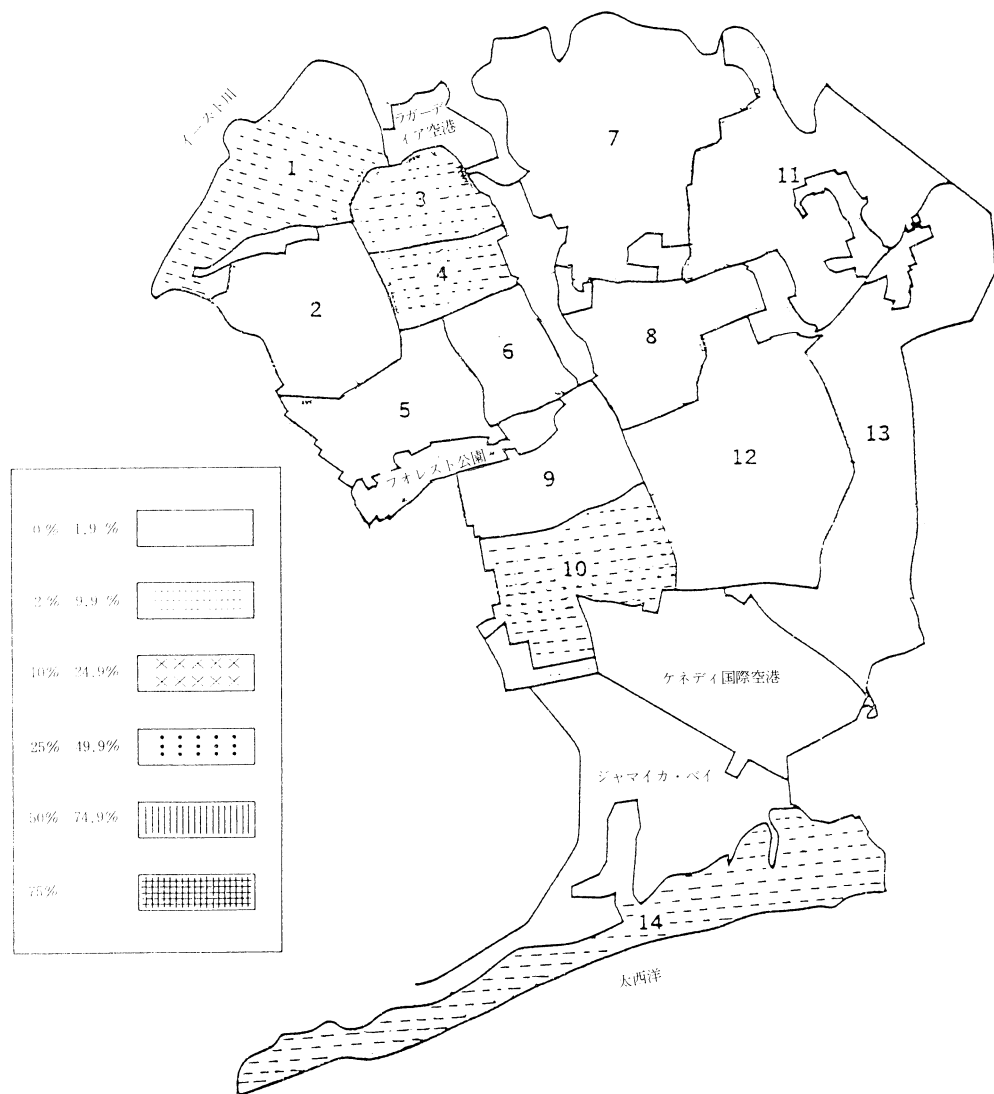
1920年代30年代のハーレム・ルネッサンスは華やかな歴史を残している。デューク・エリントンやナット・キング・コール、エラ・フィッツジェラルドなどがハーレム・ジャズの黄金期を築き演劇や芸術面でも黒人文化の素晴らしい発展がみられた。この時期にはニューヨークで初めての歌や踊りのステージショーが開かれていた。ハーレムのラフアイエット劇場へは当時の芸能人は誰もが出演を願ってひきしめき合っていたという。また金持ちのニュー Yorker 達は着飾ってこの劇場に乗りつけた。125丁目に今もあるアポロ劇場には、サミー・デービス・ジュニアをはじめ、レナ・ホーンなど一流の歌手や踊り手がここから華やかにデビューしている。

このようにセントラル・ハーレムは芸術家の

17) 砂金玲子「ニューヨークの光と影」朝日ソノラマ昭和57年 99頁

図 11 クインズ区

プエルトリコ人の割合 (CPD 別) 1970 年



メッカとしてボヘミアン芸術家たちが密集して生活し、創作に励み、ハーレムの名を世界に轟かせた。

古いユダヤ人たちにとっても、またニューヨークであっても、ハーレムは何か人の心をひきつけずにおかないノスタルジックな気分誘う故郷なのである。

その後1940年代と1950年になると人口増加もありみられなくなった。

1960年代の市民権運動の大きな衝撃がハーレム

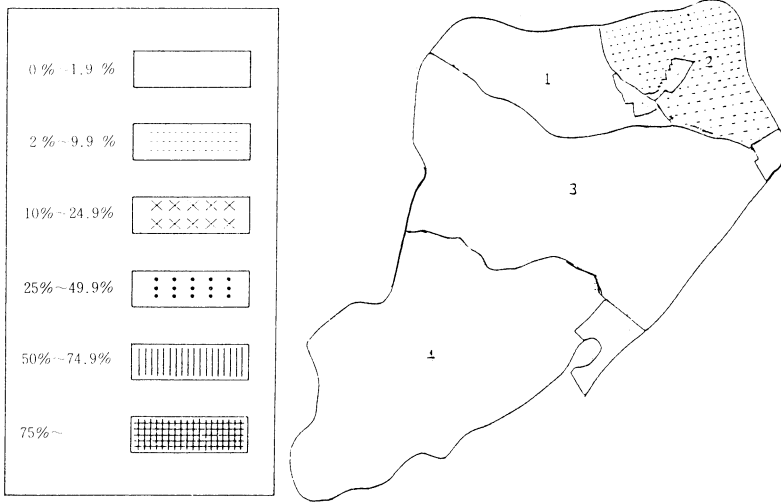
を揺るがし、暴力事件が続出した。それ以来、建物の老朽化と合いまって若者たちがクインズ区などの居住に適した区に転居したのである。一番生活環境の悪いセントラル・ハーレムでは著しく人口が減少したが、これはまた市民運動の結果、ブラックパワーで自信を得た若者たちが堂々と白人の世界に挑戦すべく、ハーレムを去ったためである。

若者たちが出て行ったハーレムには資力も体力もない老人と子持ちの女たちが残され無気力な世



図 12 リッチモンド区

プエルトリコ人の割合 (CPD 別) 1970年



界と化してしまった<sup>18)</sup>。

リーダーたちは「ハーレム週間」と銘うった立派なパンフレットを配り、ハーレムのビジネスや文化的運動を鼓舞するが、まだまだハーレムは沈滞したままである。

その代わり福祉局の存在がクローズ・アップされているのが現状である。つまり老人福祉問題と母子家族問題である。現実には地味な福祉を対象とするリーダーに欠けているハーレムでは福祉局の職員が守護神となって生活を保証しなければならない。

1970年の都市発展部の調査によると、東ハーレムでは27%の人が生活保護を受けており、セントラル・ハーレムでは25%の人たちが受けている。市全体の平均は9.7%であるから、ハーレムには貧しい人達が多いことが知られる。

またハーレムは人口が減少しただけでなく、町の性格が変化した。かつての芸術のメッカから麻薬と犯罪の巣窟と成ったのである。1960年代の黒人市民権運動時代に建物の破壊・放火などが続出して以来、ハーレムは麻薬患者や犯罪の増加が著しく、危険地区のレッテルが貼られてしまった。ハーレムは芸術文化に代わって麻薬文化のメッカ

となった。

ニューヨーク市にはハーレム以外にも黒人ゲートがあって、例えばブルックリン区のベッドフォード＝スタイベサン地区とかサウスブロンクスがあって、これらの地区ではハーレムに勝るとも劣らない。麻薬事件、放火、殺人事件などが続発している。

ところでハーレムの貧困世帯が薄く、広い範囲に次第に拡散していく傾向にある。

## むすび

最後に、むすびとして移動者についていくつかの特徴や郊外化の型についてみてみよう。

① 移動者は年齢についてみると、主に若い成人で働きざかりの出生力も強い人達である。

② 性別については、ほぼ男女の数が均衡しているが、やや女性が多い。

③ 移動者は移動しない人より高い社会階層に上昇する傾向がある。一般的にみて非白人は貧しく、また低い学歴しか身につけていない。富裕な非白人の移動者でも移動しない白人よりも社会階級は低いことが多い。

18) 砂金玲子『ニューヨークの光と影』朝日ソノラマ昭和57年103頁

④ 大量の外国生まれの人の移住者は第一次大戦中に減少し、その後、移民は制限された。その結果、ことにヨーロッパからの移民は少なくなった。

⑤ アメリカ生まれの白人は市の中心部から、外周の住居により適した区に移動した。

第2次大戦後、大量の人々が市から郊外へ移動した。

⑥ 今世紀の初めから、南部から黒人の移住者が継続して転入していたが、大量の流入は第2次大戦後であった。その数量はヨーロッパからの白人の移住者の数より少なかったが、白人の減退分を補ない、やがて総人口のかかなりの部分(2割)を占めるようになった。

⑦ 1960年～1970年には黒人の自然増は白人のそれを上回っている。

⑧ 第2次大戦後黒人もまた都市の中心から、郊外的な区に移り始めている。

⑨ プエルトリコ人の大量移民は、第2次大戦後に始まった。

⑩ 彼等は最も新参者で、最も貧しい人々である。

⑪ 1950年代はプエルトリコ人の社会増は白人と黒人をおさえて、最多数であったが、自からの自然増はマイナスであった。

⑫ しかし1960年～1970年にはこれは逆になった。社会減は16,000人となり、自然増は215,000人まで増大した。

⑬ プエルトリコ人の2世も市の中心部から住居に適した区に移住を始めた。

⑭ 郊外への移動の型は基本的に単純なものである。すべてのエスニック・グループにとって、中心のマンハッタンから外へと向うものであり、違いはその範囲と率である。

⑮ 居住地の拡散はまずアメリカ生まれの白人から始まり、外国生まれの白人がこれにつづいた。第2次大戦前は、白人にとって郊外は市内のクインズ区のようなところであった。しかし今、彼等にとって郊外とは市域を超えて、ナッソー郡やウェスチェスター郡となった。

⑯ これと対照的に非白人の郊外化はそれほど遠い地域ではない。黒人が郊外とみるのはクインズ区のような郊外的な区であり、プエルトリコ人

もほぼ同じパターンに沿っている。したがって両者とも市域内にとどまっているものが多い。

#### 参考文献

- 1) Adams, Thomas, *Population, Land Value and Government*, Regional Plan of New York and Its Environment, 1929.
- 2) Bogue, D. J., *Population Growth in Metropolitan Statistical Area 1900-1950*, 1953.
- 3) Bogue, D. J., *The Structure of the Metropolitan Community*, Univ. of Michigan, 1950.
- 4) Cugliani, Anne and Siving, Irving, *Population Characteristics 1964*, New York City, Department of Health, 1966.
- 5) Duncun, O. D., *Metropolis and Region*, Johns Hopkins, 1961.
- 6) Japanese Census, 1920-1970.
- 7) Kantrowitz, N., *Negro and Puerto Rican Population of New York City in the Twentieth Century*, 1969.
- 8) Kantrowitz, N., *New York City Migration 1900-1960*, New York University, 1969.
- 9) Kantrowitz, N., *Ethnic and Racial Segregation in New York Metropolis*, 1972.
- 10) Kogan, Leonard S. and Wantman, M. J., *Estimation of Population Characteristics*, New York City 1964-65-66, New York : Center for Social Research, City University of New York, Report No. RB-P4-68, 1968.
- 11) McKenzie, R. R., *The Metropolitan Community*, 1933.
- 12) Miller, Herman P., *Rich Man, Poor Man*, 1971.
- 13) Osaka City and Kobe City, *Vital Statistics, 1920-1970*.
- 14) Osaka City and Kobe City, *Migration Record, 1935-1970*.
- 15) The Regional Plan Association, *The Region's Growth*, — A Report of the Second Regional Plan, 1967.
- 16) Rosenwaike, I., *Population History of New York City*, 1972.
- 17) U. S. Department of Commerce, *The Social and Economic Status of the Black Population in the United States*, 1973.
- 18) 本間長世編『大いなる荒野 大いなる都市』日本経済新聞社 昭和59年
- 19) 柴田徳衛「米国大都市文明の没落」『エコノミスト』1978年11月28日
- 20) カステロ 島恭彦訳「荒廃と暴力の都市」自治体研究所『住民と自治』170,171号1977年

- 21) ウィリアム・ダブ宮本憲一他監訳『ニューヨーク市の危機と変貌』法律文化社 昭和60年
- 22) 倉辻平治「都市危機の社会理論」『大阪経大論集』129号 昭和54年5月
- 23) 矢沢澄子「アメリカ大都市の危機と資本家階級の対応」『経済と貿易』第124号 1978年
- 24) 粉川哲夫『ニューヨーク環境論』晶文社 昭和60年
- 25) 加茂川利男『アメリカ二都市物語』青木書店 1983年